

道類編

昭和二年十月廿五日第三種郵便物
昭和六年十月廿一日印刷（每月一日發行）
昭和六年十二月一日發行（一回發行）

河内山宗俊

第六年

十一月号



ともかも十五大作品中の白眉篇・

唐人お吉

高田浩吉
飯塚敏子
上山草人
主演

監督 衣笠貞之助
撮影 杉山公平

松竹キネマ

風味必ず御氣に召す

天ぶら御料理

季節日本御料理

芝居情緒と食道楽
喜久屋食堂

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を！

道頓堀戎ばし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町下ノグリ橋





道頓堀 昭和六年十一月號 第六十二輯

櫓 口

◇十一月の中座◇時今也桔梗旗上◇吉右衛門の武智光秀・三津五郎の四王天・吉右衛門の武智光秀・もしほの桔梗・友右衛門の小田春永・好太郎の森蘭丸◇關の馬士頃◇友右衛門の靈坂左内・魁車の興作・秀調の重の井・廣太郎の三吉◇粟小屋の場・友右衛門の左内・秀調の重の井・魁車の興作・廣太郎の三吉◇ひらから盛衰記・吉右衛門の松右衛門の権四郎・豊子の駒若丸・時藏の女房およし◇福島遊樂の松の場・三津五郎の重忠・吉右衛門の兼光・時藏のおよし・豊子の駒若丸・友右衛門の權四郎◇二人狸々・三津五郎の環々◇三社祭・三津五郎の悪玉・時藏の善玉◇河内山・吉右衛門の河内山宗俊・魁車の直待◇松江侯支關先の場・吉右衛門の宗俊・友右衛門の小左衛門・吉之丞の大膳◇教草吉原雀・三津五郎の雀賣笹七・秀調の雀賣お竹・九藏の鳥さし忠六◇十一月の浪花座◇丹下左膳・辰巳の左膳・中井の越前守・金井の泰軒◇彌太郎笠・久松のお牧・島田の彌太郎◇十一月の角座◇中村大尉遭難事件◇波多の井枝曹長・山口の中村大尉・和歌浦のハルビンお松◇駒馬哲學◇辻野の無頼漢・山口のある男◇投伊節彌之◇中田の稻葉彌吉・福岡のお花・富士野のお千代◇京都座◇晝の部◇鶴山姫捨松・吉三郎の岩根御前・扇雀の中將姫◇釣女◇扇雀の醜女・長三郎の太郎冠者◇菅原授手習鑑◇長三郎の櫻丸◇成太郎の八重◇夜の部◇壽會我對面◇駒之助の十郎祐成・壽之助の五郎時致◇十一月文樂座◇伊賀道中双六◇政右衛門内の段◇沼津千本松原の段◇沼津の里の段◇大廣門の段

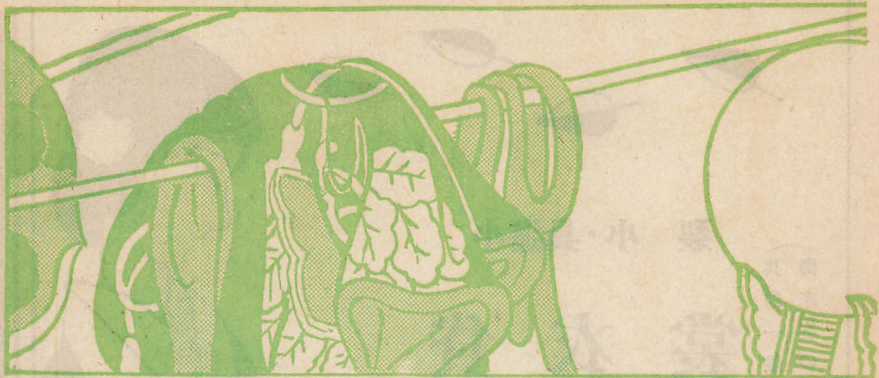
◇表紙……………(河内山宗俊)……………錦繪古版講……………

吉右三役

河内山・直侍・三千歳……………(狂言の解割)……………矢田挿雲(二)
 吉右衛門の馬盟の光秀……………森ほのほ(二〇)
 河内山雑話……………高谷伸(二六)
 吉右衛門三役……………遠藤爲春(四〇)

紙上 舞臺

◇時今也桔梗旗上……………(中座)……………松香花蝶(二二)
 ◇河内山……………(中座)……………(二六)



◇扇雀君に寄す……〔進歩と成長と〕……………山本修二（二〇）

◇成駒家兄弟の舞臺……〔青年歌舞伎の思出と〕……………西尾福三郎（四二）

人形淨瑠璃史に於ける……

◇近松半一の功績……………倉田啓明（三六）

◇子母澤寛氏點描……………渡邊均（二二）

◇私の調べた投げ節の起源……………辻野真一（二四）

◇「投げ節彌之」と「彌太郎笠」に就いて……………子母澤寛（四六）

新聲劇樂屋話……………X Y Z（一六）

◆鷹治郎の昨今……………日比繁治郎（二八）

◆鷹治郎を思慕す……………富田泰彦（三三）

□劇壇往來……………（四八）

◇編輯後記……………（五〇）

◇挿繪カット……………田中滿彦

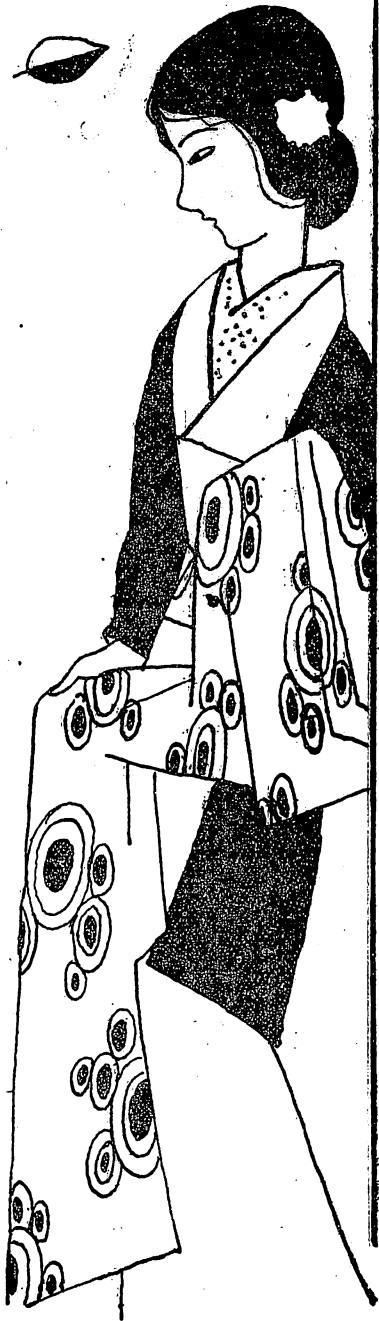


裂 小・具道小
裳 衣 貸

(其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい)
御來客の御相談に、應じ便利よく取計ます

素人演藝會
宴會の催物
春秋溫習會
婚禮の衣裳

松 竹 衣 裳 部



本店

東京支店

大阪市浪速區南坂町松竹ビル内
電話 戎 五 六 三 四 番
東京市淺草區並木町十五
園電話淺草五五九九番

純白固煉

新發賣

御園チタニウム白粉

驚異的

新化粧美!

正價 金五十錢



■ 艶麗な濃化粧に ……

目もさめる様な白さ。明るい華やかな澄み切つたお化粧上り。

■ 清楚な淡化粧に ……

うすく溶いても白さが濃く、ノビが平らでムラがなく、さつぱりした美しさ。

■ お襟の魅力に ……

くつきり冴えた美しさ。お召物を少しも汚しませんから快くつかへます。

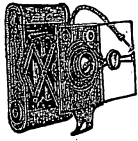
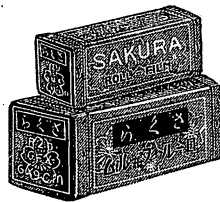
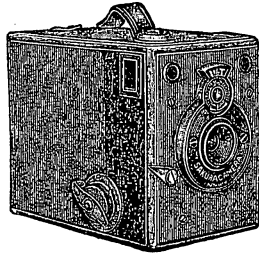
□ 断然優良な新原料が持つ此白さこそ

新日本女性美です!



御家庭の御團樂に必ずカメラを！

さくら
カメラ
フ井ルム
(御子達向のベスト判三圓五十錢)
(ベスト判四十五錢其他各判有り)



トツレーバ
圓五廿、圓七十

(カタログ進呈)

寫眞機及小型活動寫眞機

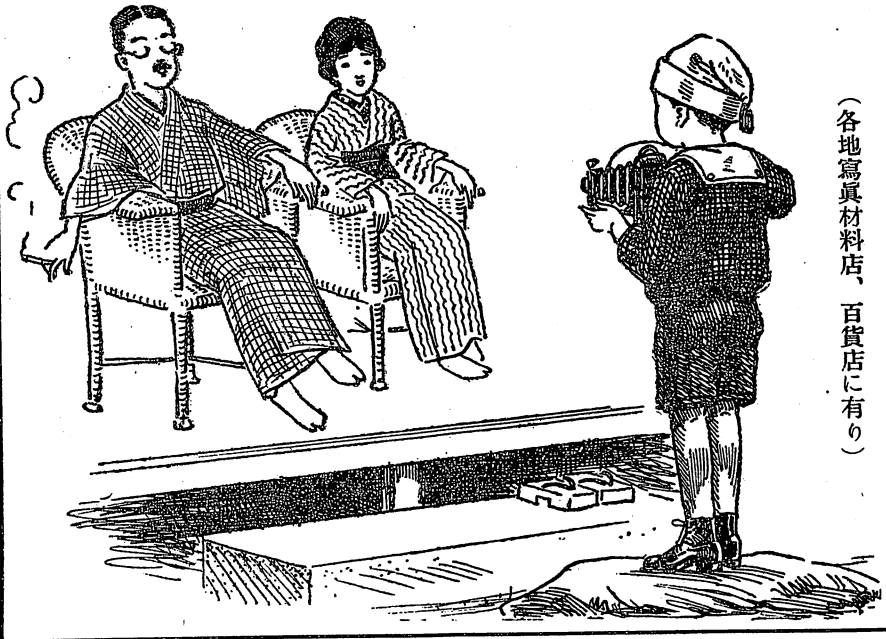
小西六大阪支店

大阪市長堀橋筋

電南

二二九二
三三〇四
三九八三番

(各地寫眞材料店、百貨店に有り)





門衛右吉村中・秀光守向日智武

げあ たは のうけきまいはきこ
“上旗梗桔也今時”

中座十一月興行

“ ときはいまきけうのはなあげ
時今也 桔梗旗上 ”

武智日向守光秀
四王天但馬守

中村吉右衛門
坂東三津五郎



愛宕の宿場

“ 唄士馬の關 作與 ”
井の重



鷺坂左内
大谷友右衛門

ほしも村中・梗桔妹秀光



本能寺
客殿の場



小田土總守春永
森 蘭丸
武智日向守光秀
大谷友右衛門
坂東好太郎
中村吉右衛門

御饗料

。蒸祭

お芝居の
お帰りを
せしおまら
いたす
居ます

道頓堀松竹座前

電話南

四九四
八八四
四二〇



アングロス井ス

ミルクチヨコレート

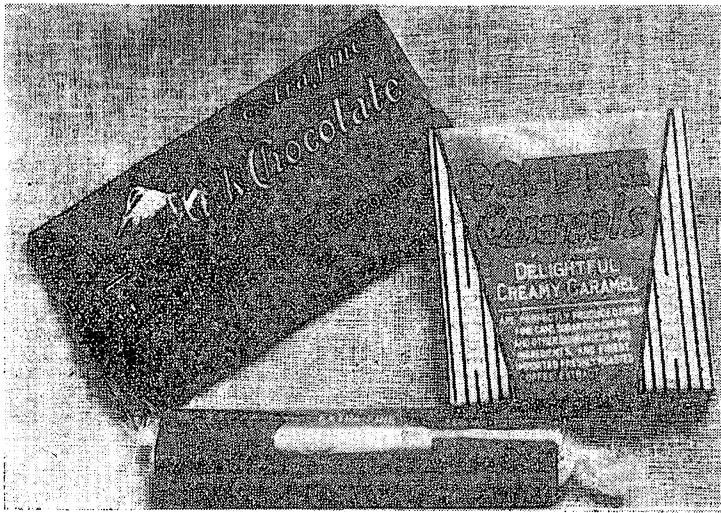
コーヒキヤラメル

チヨコレート
キヤラメル

大阪市東區豊後町三番地

發賣元 株式會社 横山商店

電話東(94)二〇六一番



關馬の士 與作 井の重

丹波與作・中村魁車

調秀東坂・井の重人乳
郎太廣谷大・吉三の生然自



場の屋小藁宿の關↓



乳人重の井・坂東秀調
鷺坂左内・大谷友右衛門
丹波與作・中村魁車
自然生の三吉・大谷廣太郎

中座一十月興行

ひらな盛衰記



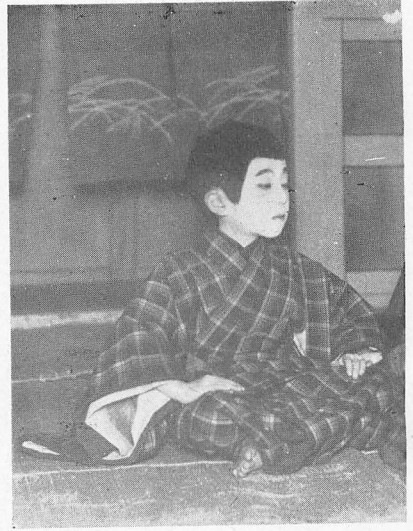
秩父庄司重忠・坂東三津五郎
樋口次郎兼光・中村吉右衛門
女房およし・中村時藏
木曾の駒若丸・坂東豊子
船頭権四郎・大谷友右衛門

松右衛門女房およし・中村時藏

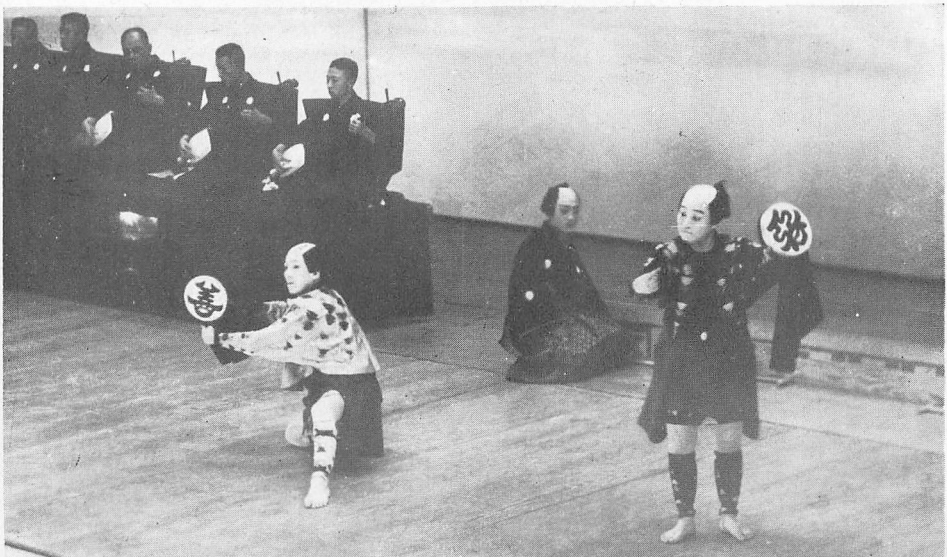
船頭松右衛門
實は樋口次郎兼光
中村吉右衛門



福島逆艦の松の場



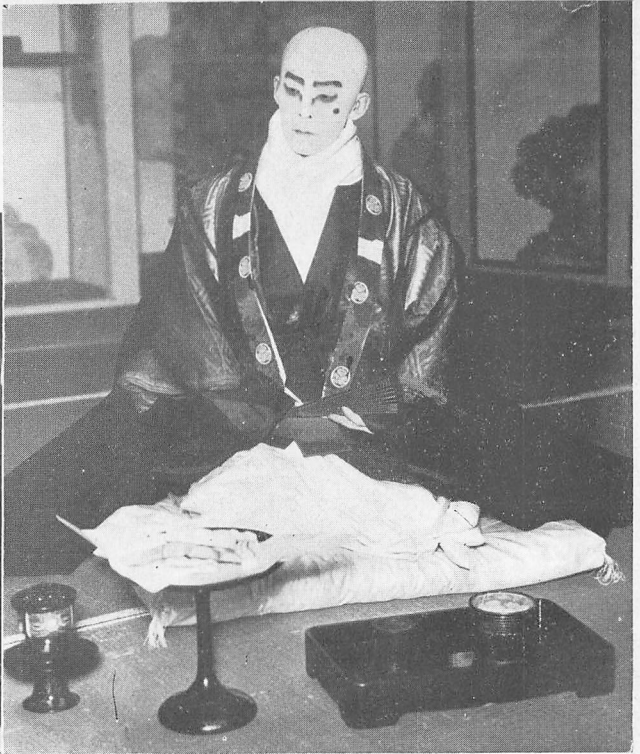
船頭権四郎
大谷友右衛門
木曾の駒若丸
坂東豊子




山 内 河



郎次直岡片は實・吾新井櫻
車魁村中



門衛右吉村中・俊宗山内河

場 之 先 關 玄 侯 江 松 

亟之吉村中・膳大村北

門衛右女谷大・門衛左小木高

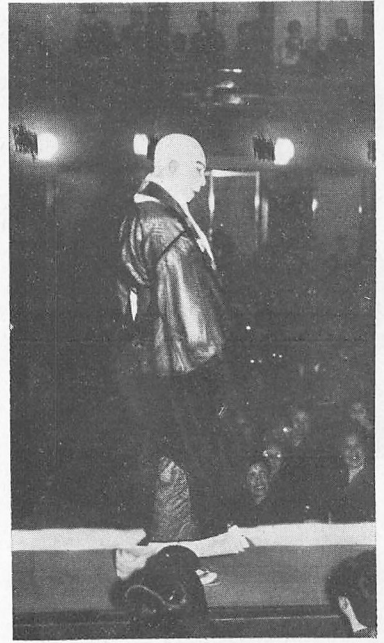
門衛右吉村中・俊宗山内河



“ 教 草 吉 原 雀 ”



雀 賣 七 三 東 坂 ・ 五 津 郎



河 内 山 宗 俊
中 村 吉 右 衛 門

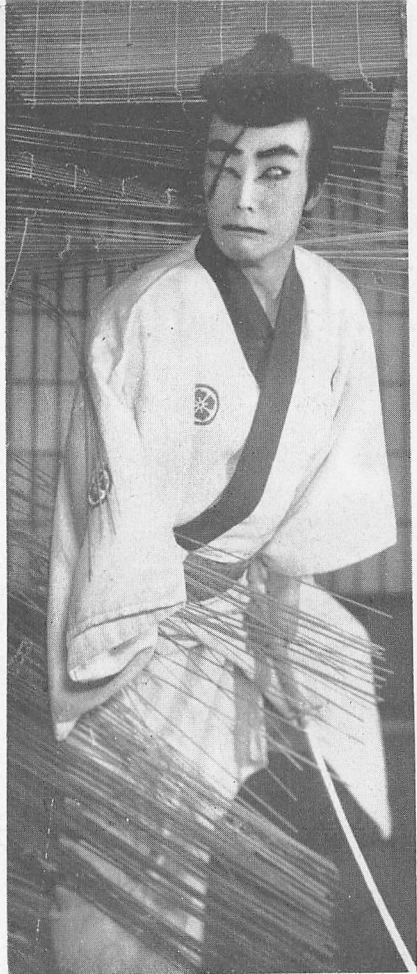


六 忠 六 忠 鳥
藏 九 川 市

十一月の
中座



竹 賣 雀
調 秀 東 坂



“丹下左膳”

丹下左膳

辰巳柳太郎

浪花座十一月興行・新國劇

“彌太郎笠”



桔梗屋のお牧

久松喜世子

助之謹井金・軒泰生蒲

哲井中・守前越岡大



二本差の彌太郎

島田正吾

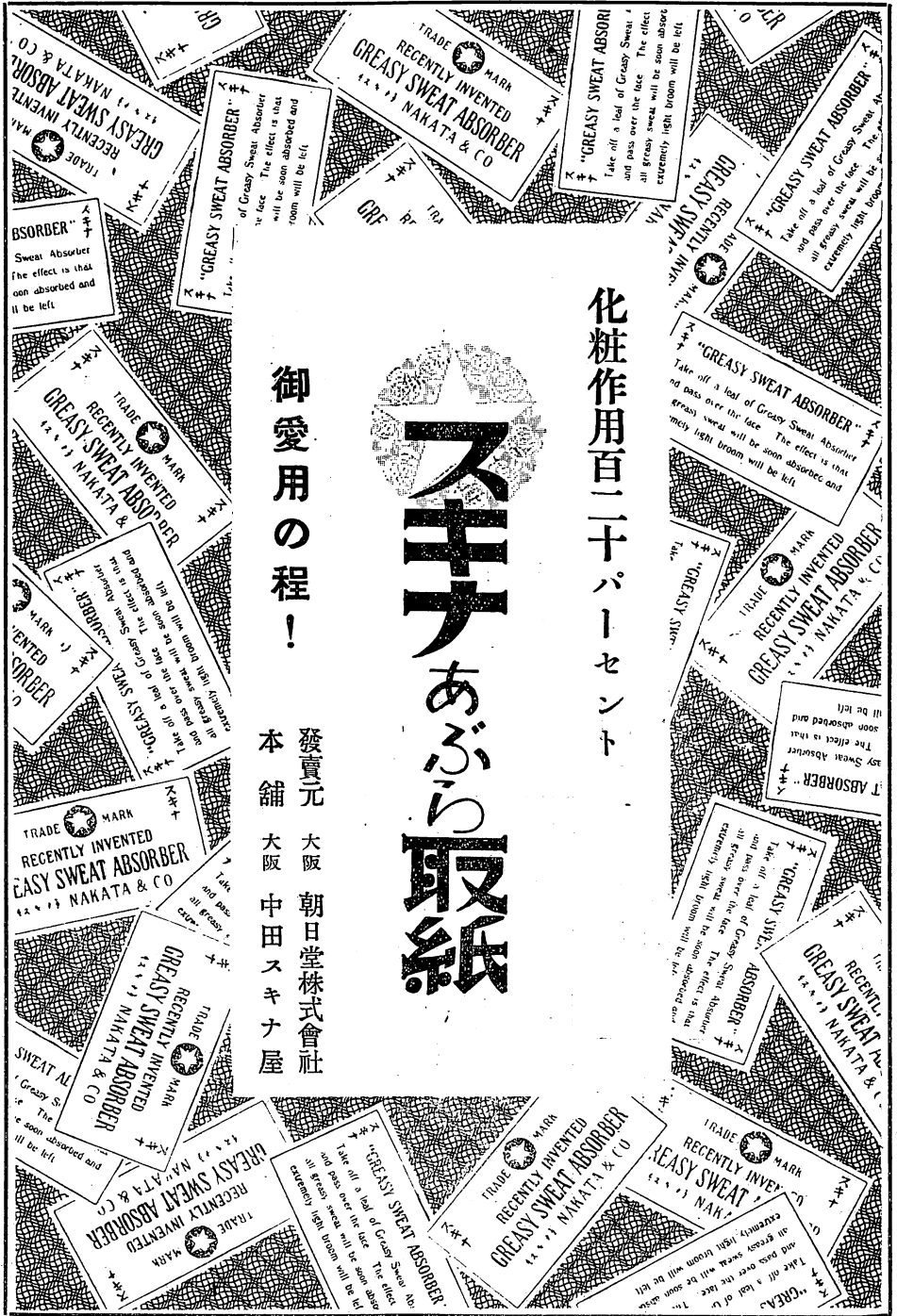


化粧作用百二十パーセント

スキナあぶら取紙

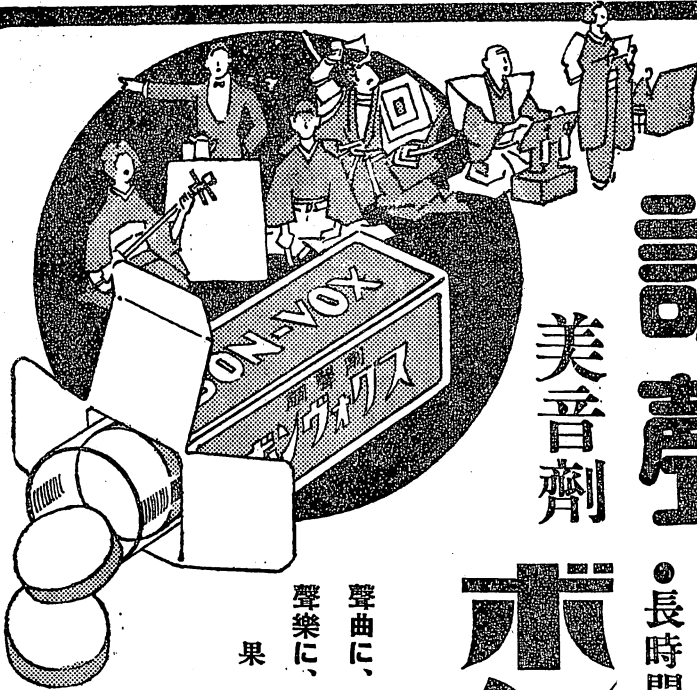
御愛用の程！

發賣元 大阪 朝日堂株式會社
 本舖 大阪 中田スキナ屋



調聲

美音劑



- 聲を美しくし.....
- 咽喉を滑らかにし.....
- 長時間の發聲を疲らせぬ

新發賣

知名藥店にあり

ボングオクス

…内服用の錠劑です…

聲曲に、講演に、
聲樂に、座談に、

從來の飴を基劑にしたものや薄荷様の美音劑とは全く異り、中樞神經を刺激し喉頭の血行を旺盛ならしめ、聲帯に適度の緊張を與へ自由なる振動を營ませます。

果 然.....

鷹治郎、歌右衛門、羽左衛門、幸四郎、松尾太夫、延壽太夫、土佐太夫、鏡太夫、伊十郎、六左衛門の諸名家より絶讃を博して居ります。
ボングオクスは今や音曲、樂界で話題の中心となつて居ります。

効力は服用後數時間に亘り持續す。

「用法」 大人 一回 二錠
小人 一回 一錠
發聲前三十乃至一時間
に水又は白湯にて服用

「價格」 一〇錠入 一圓
一〇〇錠入 七圓五〇

製造元 神戶市二番町
販賣元 大阪市東區邊野町
株式會社 神戶衛生實驗所
株式會社 武田長兵衛商店

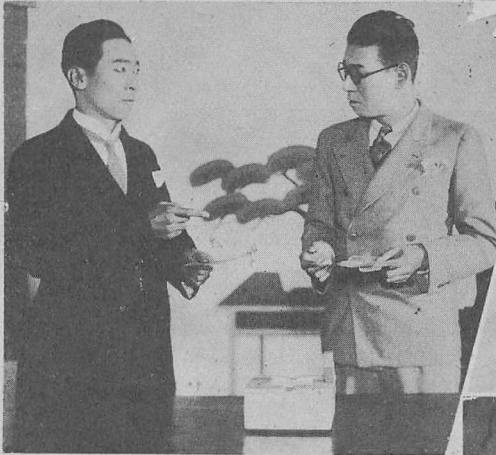
“中村大尉遭難事件”

元騎兵曹長 井衫延太郎・波多・種
陸軍大尉 中村震太郎・山口俊雄
ハルビンお松・和歌浦糸子



“駙馬哲學”

無似漢 辻野良一
或る男 山口俊雄



稻葉彌吉

中田正造



“投げ節彌之”

お花・福岡君子
彌之助・辻野良一
姉お千代・富士野葛枝

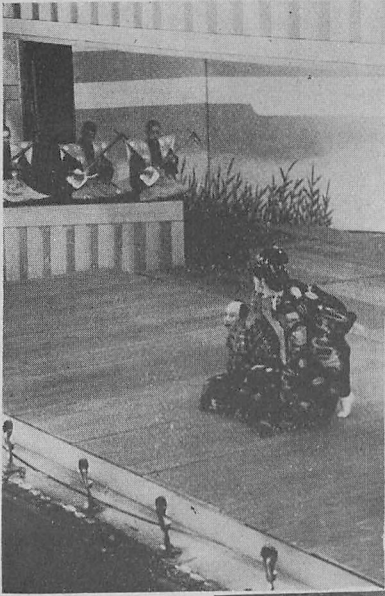


郎八川伊・吉忠元貸



◆ 部 の 畫 ◆

“ 女 釣 ”

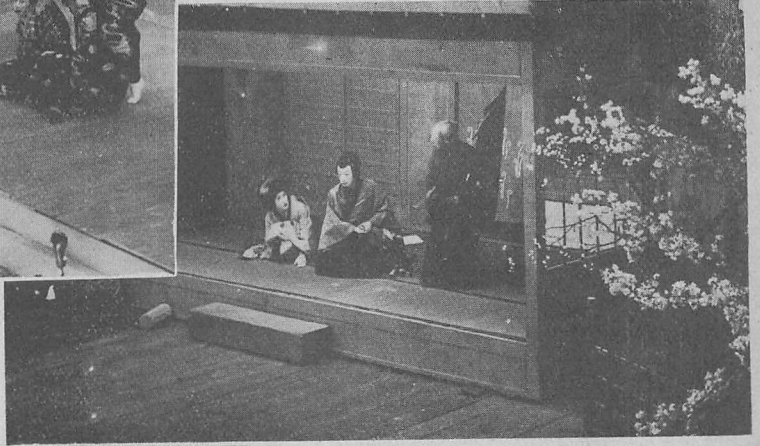


醜 女
太郎冠者
・ 林長三郎
・ 中村扇雀



“ 鷗 山 姫 捨 松 ”

岩根御前
・ 中村扇雀
・ 吉村中
・ 三郎



“ 壽 會 我 對 面 ”

◆ 夜 の 部 ◆

十郎禰成
・ 中村駒之助
【五郎時致
・ 阪東壽之助

“ 管 原 傳 授 手 習 鑑 ”

櫻丸
・ 林長三郎
・ 八重
・ 中村成太郎

山葉ピアノ

¥ 500.

月賦

(月拂十九円)

月賦規定カタログ進呈



大坂市四ツ橋南

日本樂器會社

中川式噴霧注入器

蓄膿症鼻加答兒

呼吸器病

咽喉諸疾患

特徴 醫師は勿論何人にも爲し得る施行療法にして
全く大衆的貢獻と誇る可き破天荒の發明品

定價 一組金二圓五拾錢 普通箱入金二圓 水藥金一圓五拾錢



發賣元

順天大藥房

大阪市東區高麗橋詰町一九

“ 辻
斬 ”



“ 艷容女舞衣 ”
舞臺面



岩倉宗玄
林長三郎
折琴姫
中村成太郎
“ 岩倉宗玄 ”

斬



三代將軍家光 中村扇雀
大久保彦左衛門 市川九團次



“ 夕霧
廊 ”

文 章

藤屋伊左衛門・林長三郎
扇屋夕霧・中村扇雀



伊賀越
道中双六



「政右衛門屋敷の段」

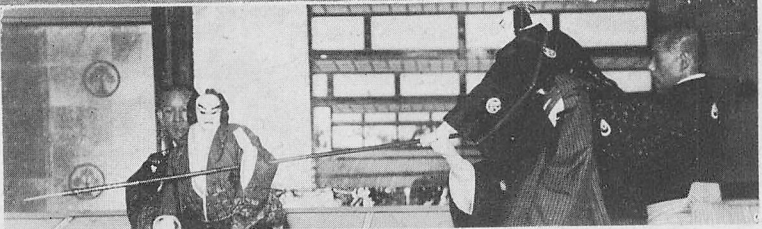


「沼津千本松原」



「沼津の里」

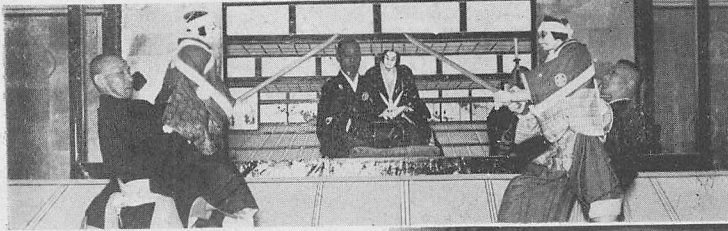
重兵衛・榮三
平 娘 およね・文五郎
作 玉次郎



大内記・玉松
政右衛門・榮三



「大廣間の段」



桂川連理柵

「道行の段」



文樂座十一月興行

人形浄瑠璃

あらゆる印刷



永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目

大阪中央局私書函第壹壹八號

電話土佐堀

(44)

三〇八三番
四九九四番
四九四〇番

振替大阪一九三九〇番

最も効果のある
宣傳には優れた
印刷物の御利用
が一番です！

大阪市西區江戸堀南通二丁目

親切・美麗
迅速・正確

プラト[。]ン社印刷所

電話土佐堀・七九九・九〇七番

雜誌·新演劇·月刊

十一月號

演類編

第六年

第六十二輯





狂言の解剖

歌舞伎と實説

河内山直侍、三千歳

矢田挿雲

(上)

先年吉右衛門が市村座で河内山を演る少し前、下谷練堀町の鳥料理河内山の泉水に面した六疊の間で「は、あ是が私の居間ですか。私は此の柱へ斯うして凭れてゐたんですね。すると恰度其の邊へ直侍などが能く遣つて来て、三千歳の惚氣なんか聞かされたんですナ。時に私が好い男だつたと云ふなア全くでしやうか」河内山の主人が「え、男前なら申分無しです。門の前に子供が居ると、何時でも天保錢を一枚づゝ呉れるんで子供等は河内山の小父さんていと生り下つたさうです」斯んな問答があつた。その河内山といふ鳥料理は松永町の停留場で降りて、市村座の少し手前を西へ這入つた行拔

け路次の中ほどにある二階家である。宗俊の居間になつてゐた茶室風の六疊の間は、當時のまゝ、保存され、其座敷に面した十坪ばかりの四角の庭も、鳥屋の代になつてから稍々手を入れてはあゝるが、三代將軍遺愛の石燈籠も、時代の附いた大きな庭石もそつくり残つてゐる。又築山の腰を洗ふ泉水も宗俊が琉球金魚を放して豪奢を衒つた頃の、佛を留めて如何にも清々しい。

宗俊は今閑院官邸になつてゐる松平出羽守（雲州松江城守松平不昧公の父）の屋敷へ乗込み化の皮が現はれると「如何にも俺ア河内山だ……抜き差はらねエ高頬の黒子、星を指されて見現はされちやア、へ」と云ふから閉口するののかと思ふと

「へ、此儘にやあ歸れねえや」と法衣の尻を捲くる長袖啖呵は、大向ふの狂喜する所で、夫れに絡んだ直侍と三千歳の濡れ事が是又奇妙に江戸ッ子を喜ばせる。清元の淨瑠璃を配つた羽左衛門の直侍を見てから「私も好い男の悪黨を情人に持ち度い」と俄に善良な旦那を虐待し初めた藝者があるのは呆れたものだ。人氣が多いだけ夫れだけに河内山と直侍の傳説は、枝に枝を派して眞事空事の境界が怪しくなつてゐる所謂實録も怪しく芝居も怪しく、講談も怪しく、甚だしきは三千歳の結末さへ區々に傳へられて居るが、右の舊宅と赤坂青山久保町の高德寺にある「求道淨欣信士」とした河内山の墓だけは本物だから、此二つの史蹟と比較的河内山に接近した故老などから言傳へた口碑とを參酌して一通り此江戸傳説一方の巨頭を料理する。

宗俊は宗春が本當で祖父宗久、父宗築と代々大奥紅葉山お時計の間の坊主を勤めてゐた。幼名藤太郎と云ひ、宗築の後妻に生れた一人息子であるが、天性俊敏で物事の判断が正しく、膽が太くて爲る事が狡猾だつた。今に廢らぬ古手の詐欺だが、勸番中の宗築から頼まれたと云つて衣類を詐りに掛つた奴があつた。藤太郎は「父の共をして行つた仲間聞いて見るから待つて呉れ」と云ふと悪者は青くなつて出て行つたので、藤太郎は許偽はあんな風ぢや駄目だと云つて細かく自分の工夫を傍の者に話して聞かせた。その時藤太郎は十五歳

であつた。

我國で五十人以上の子供を作つた男は十一代將軍家齊公と岩谷天狗だけで、松方公爵の分は曾て明治天皇から何人あるかと御下間を忝なうしてお答へが能きず一篤と取調べました上で……と汗を拭いて退出し、其後の奉答に關しては文獸の徴すべきものが無い。その家齊公の愛妾おふみの父旗本中根五左衛門は、家齊公の隠退して碩翁と號し、向島の寮で植木を捻りながら折々登城して閨縁の威を振つてゐた。頗る下情に通じ人情の弱點を心得た狸爺だから、河内山のチャキくした所が氣に入り何かの役に（どうせ悪事）の立つべき坊主と目をかけるので、河内山は此の默契を笠に被て殿中では大名を輕蔑し、市中では賭博師を尊敬し、何に限らず悶着事があれば卽座に神謀鬼策を案出して渦中に飛込み、弱い者が凱歌を奏して強い者が降参するやうに仕組み、一人を泣かせる反面には十人を喜ばせ、自分も儲けて夫れで居て鳥渡岡ツ引などの手出しがならないやうな目の詰んだ磨の掛つた小氣味の好い悪事を働いた。河内山と直侍の片岡直次郎が伯父甥の仲だといふ説は怪しいので、矢張り依田彌右衛門の娘お雪の危難を助けたのが交際の端緒であらう。彌右衛門は四國筋の浪人で、お雪と二人赤坂溜池に住んで居たが、或晩彌右衛門の不在に、碁友達の八木作藏といふ平藩士が来てお雪を威嚇して居る所へ、河内山が來合せて作藏を弾き飛ばしお雪

の信用を得て終つた。八木作藏功を一箕に缺きし口惜しさに翌晩お雪を浚つて品川沖へ漕ぎ出すと、今度は夜釣をしてみる片岡直次郎が作藏の船へ躍り込んでお雪を助け、是又お雪の信用を得て終つた。

或日河内山が麴町八丁目邊の料理屋で夕飯を喰べて居るとお雪と直次郎の二人にパツタリ出逢つた。河内山は「成る程」と思ふ心を色にも出さず同席して献酬しながら「お雪さん芝居は面白うござるな。顔世御前の歌に、さなきだに重きが上の小夜衣わが夫ならで襟な重ねそ、女はすべて斯くあり度きものでござるな」之を聞いて直次郎も「は、あ」と感付いた河内山が機嫌好く其處を出て二三丁歸りかける後から直次郎が追つかけて来て「腐つた女にほんのりお灸、イヤ直次郎敬服致した」と夫れから女氣無しで飲み直して兄弟の約を結んだ。直次郎は微蔵な渡り用人の粹で、學問は出来ず武藝は嫌ひ、其代り酒と女と賭博には強い興味を有つて居た。河内山と交つてからは誘ひ誘はれ吉原に通ふうち、江戸町二丁目大口屋の三千歳と云ふ花魁の情夫客になり、無理な金を算段しては足繁く通ふやうになつた。其の遊興費は主として賭博で儲けた金だが賭博で負けた時は強請りもした。河内山の方は悪事の見識が稍高いけれど直侍の方はどんな下等な悪事でも働く。下谷から本郷へかけて軒並算段みで、「あんな男のどこが好くて三千歳が騒ぐんだらう」と噂の種子であつた

さうだ。而も直侍は依然として悪く。三千歳は依然として惚れてゐる。或時遊蕩費に詰り御家人の山田源之助と共に強盗を働いて八十兩を山分けにしたことがある。源之助は折々其事を口走るので、直侍は本郷湯島新花町靈雲寺横、俗に大根畑と云つて賣笑婦などが居た附近の自宅へ源之助を呼び寄せ、酒で盛潰して締殺し、其の死骸を廣小路まで擔ひ出していかう松坂屋の筋向ふ(松坂屋は昔も今も同じ場所)にあつた兩替商大黒屋吉兵衛の軒へ吊り下げ「大變です」と家人を叩き起し「私は御町内の者ですが、一杯飲まして下されば密り此死骸を取捨てませう」と十兩出させ、恰でランプを吊換へるやうに横丁の豆腐屋の軒へ吊換へた。かうして置いて一年程後に大黒屋を訪ひ「死骸取捨は天下の御法度、お恐れながらと出た日には大黒屋の大黒柱もぐらつかうぜ」と厭がらせて數回に百八十兩詐り取つた。

或時河内山と二人で中仙道を放し、深谷宿小川旅館の女房お瀧が、賊に寢首を缺かれながら些しも血が出なかつたと云ふ話を聞くと、河内山は直ぐにお瀧の不貞事件を推斷した。小川屋の亭主に「お瀧に逢ひ度いか」と聞くと「夫れはモウ生きてさへ居りますれば」との返事「ぢやあ連れて来てやるから何にも云はずに可愛がつてやれ」と其足で直侍と二人檀那寺の普門寺に押込み、住職とお瀧の首根ツこを押へつた「太い坊主だ今度だけは勘辨してやるから禮を出せ」と百

四十兩捲上げお瀧を亭主に居けて茲でも百兩の禮を取つた。初め河内山は「血の出ない死骸」の話を聞くや夫れは死人を換へ玉に使つたのだと推定した。此推定から墓場の死體發掘を推定し、死體發掘から坊主の亂行を推定し、開うしてお瀧は殺されたと見せかけて寺の一間に潜んでゐるのだといふ結論に達して二百四十兩に有附いたのである。

又或時河内山は淺草雷門の前で鐘を叩いてお念佛を稱えてゐる乞食婆に向ひ「私もお前位の實母があつたが、孝行をし度い時には親は無し、何卒私の養母になつて孝行をさせて下さい」と人並な事を云つて坂本町二丁目の乾分權次方へ連込み、翌日は大家の御隠居様に仕立て、直侍と三人で松坂屋へ買物に行つた。緞子羽二重など三十反都合百十兩ほどの品を撰り出し、婆さんを人質に残し鳥渡家へ持つて行つて見せて來ると云つて河内山と直侍は姿を晦ました。其時河内山は「おツ母さん是は金の包みですから」と預けて行つた袱紗包みを開くと、婆さんが昨日まで淺草で叩いてゐた汚い鐘と撞木が現はれた。松坂屋では婆さんを小突廻して責めたりれど、婆さんオロ／＼するばかりで要領を得ず、ト、雷門の乞食婆なることを告げしないわけに行かなくなつた。河内山の悪事には茶目氣分が付き物だつた。

駿河臺の井上正之丞といふ旗本が古渡り珊瑚樹を日本橋銀町小間物商竹屋彌兵衛方へ預けて簪に取附けさせると

小さな瑕から夫れが二つに割れた。竹屋では青くなつて詫びたが「あれは一萬兩の値がついて居る家重代の寶だ。一萬兩出すか娘を出すか」と威して遂々娘八重を連れて行つて自分の妾にした。ところがお八重は家に居る時同町内の質兩替商大野屋伊八の伴衆次郎と行末を約して居たので、私かに井上の屋敷を脱け出で、衆次郎と二人寺島村の菩提所なる蓮華寺で心中を企てた。其處へ通り合せた河内山は二人の話を聞くで「畜生」と云ひさま駿河臺の井上の屋敷に怒鳴り込み、井上が威しに振廻す白刃の下に胡座を掻いて「屋臺骨を曲けて呉れるぞ」と逆捻を喰はせて、遂に井上から百兩の謝罪金を取り、八重と衆次郎の兩家からも百兩貰つて自分も溜飲を下け、弱い者共を喜ばせて自分では大した功德をしたやうに思つて居た。

其頃幕府の利者は老中脇坂淡路守で飛ぶ鳥も落す權勢だつたが「脇坂を恐れぬ坊主二人あり、上野に一人中野碩翁」といふ落首が行はれた。上野の坊主は即ち輪王寺宮である。恰度文化四年の或日脇坂淡路守が乗物で登城の砌り、供侍の一人が河内山の肩に嫌といふほど突當つたま、挨拶をしないで行過ぎた。高等強請業の河内山、何條之を不問に附すべき其足で脇坂邸に供頭増田市之丞を訪ね、平謝罪に謝罪せられた上で五十兩取つて來た。又或時は神田橋外に在つた阿州侯の大部屋で、大賭場が開帳されて居ることを聞込むと直ぐ乗込

んで二百兩にした。又或時箱根の福住樓に逗留中、隣座敷の若夫婦が同宿の篠崎竹庵といふ町醫者と賭碁をして五十兩ばかり負けたので、竹庵はお浪といふまだうら若い女房を五十兩の抵當に連れて行かうとすると、河内山が飛び込んで五十兩の借金を拂つてやり、今度は自分が竹庵と手合せをして今出した五十兩の外に又五十兩勝つて竹庵の清顔を尻目に「左様なら」と云つて引揚けた。是などは勿論大變な善根をしたつもりである。俵客を以て任じてゐた河内山は「善い事をしたあとと胸がスツとして氣持が好い」といふ倫理觀念であつたのだから譯は無い。

河内山は曾て友人と品川の遊里に遊んだ際、清元の師匠の延清といふ美人を通りすがりに見つけ、延清が品川大蓮寺の外妾といふ事が分ると、寺社奉行の隱密に化けて大蓮寺に踏込んで、内濟金を取り延清と縁を切らせて自分の物にした。坊主も滑稽だが河内山の仕草にも可笑味がある。直侍は或日千住掃部宿油屋九兵衛の娘お花の縁談を聞くと、本所割下水旗本小堀内記の家來水島藏太なる者に化けて油屋を訪ひ、お花の曾て小堀の隣家に奉公中、小堀の倅松の丞と深く語りひ置きながら、其約束を反古にして他家へ縁づくとは……と根も葉も無い事を店先で我鳴り立てた。お花は思はぬ宛に自害して潔白を示さうと云ひ出す、親類一同青くなつて止める結局泣寝入りで出した飲代を直侍は懐へねぢ込んで歸つ

て來た。又河内山の一の乾分の暗闇の丑松といふ遊び人は、神田の道具屋で糶市が立つた所へ行合せ、本郷元町の金といふ道具屋が「此頃は碌な物が出ません誰か廣徳寺の瓦でも剝がさねエかな、一枚剝がしたら百兩やつても好い」と廣言を吐いたので、其足で八丁堀霞屋の手代吉兵衛に化けて廣徳寺を訪ひ、門の瓦を寄進し度いと申込んだ。寺では二つ返事で承諾したので翌日金を同道し寺へは「瓦の寸法をとらして下さい」と云つて公然に瓦を剝がして金から百兩取つた。金は百兩取られながら「やり方が面白い」と馬鹿に嬉しがり、歸りに車坂の料理屋で丑松に御馳走した。以上三人の變裝悪事の例でもわかるやうに、直侍の行り口が一番残酷で一番下等だが、三千歳は夢中になつて此無賴漢に打込んだ。

(下)

三千歳は大口屋の一枚看板で身分のある者や金のある者が彼の一整一笑に與らうと思ひ、足を空にして通ふ中から選りに選つて悪漢直侍に深くも許した。素封家の森田清藏、劍客金子市之丞など、鞘當をして、金も無ければ力も無い直侍の見ぢめな姿が、三千歳の目には可愛くてならなかつた。大口屋では勿論二人の間を堰いたから三千歳はブラ／＼病になり、入谷の寮へ出養生をしてゐる所へ直侍は雪の夜な／＼こがれて通ひつめた。その入谷の寮は即ち現在の下谷

區新坂町——坂本二丁目の停留場を右に這入つて一二度折曲つた所にある前田利同氏の別邸が夫れだといふ説がある。芝居の直侍は默阿彌一流の繪模様になつてゐて、忍ぶ戀路の綺麗な感じで一杯だが、實際の直侍はそんなロマンチストでは無く、河内山の軍師として三千歳を大口屋から盗み出し間も無く夫れを清藏に賣りつけたのである。其晩直侍は三千歳に袴を穿かせ、黒縮緬の宗十郎頭巾で眉目を包み、大身の隠れ遊びと見せて大門を誤魔化し、練堀町の河内山の宅へ籠で連れ込んだ。

河内山は三千歳を緊と預かり、大口屋から手強く掛合つて來たのを追歸して置いて、自身森田清藏の處へ出かけ「三千歳が貴方に逢ひたいと云つて私の家まで逃げて來ました」と云ふと「冗談云つちや不可ません。三千歳の情夫客は直侍、私は只のデレ客、それを知らぬ河内山さんでもございませまい」と下手に締め上げられ河内山は眼を白黒した。河内山の横車を押戻したのは後にも先にも清藏一人である。併し私も野暮は申しません。綺麗に身受して一年の間構ひます。それから後は直侍と一緒にならうと何うしやうと勝手だが、一年内に二人が會つたら直侍の首を申受けます。そこで清藏は三千歳を八百兩で落籍して、河内山と直侍に繩の掛る所を助けた。が三日と逢はずに居られぬ戀仲とて、直侍が或晩三千歳の許へ忍んだ所を清藏に見つけられ、河内

山立會の上で清藏へ首を渡す羽目になつた。其時清藏は「首なんか貰つたつて仕方が無いから」と三千歳を再び廊に沈め八百兩の金を辨償させた汚い裏腕に、河内山はペックと唾を吐きながら舌を捲いた。

清藏は表面堅氣の商人と見せて、實は仙臺無宿青葉山の清藏と云ふ肩書付の大泥棒であつた。赤坂山王の老中安藤信成の娘お直の媒妁を頼まれながら、自分がお直に執着し、贋旗本を作つて見合をさせ、向島の寮へ興入の晩に供の者共へ麻痺藥の入つた酒を飲ませてお直を犯した上二千兩の持參金を奪つて乾分と共に高飛したほどの悪漢である。お直は可哀相に之を耻ぢて尼となり、青山五丁目の善光寺で一生を終つた。河内山は或時お時計の間に附屬してゐる純金の瓶子を持出して、自宅の近所の鋳屋長次と同じやうな錫臺金鍍金の贋物を作らせ、本物を自分の手許に留め贋物をお時計の間へ返して置いたと勘くとも自分では開う信じてゐたら、上にはあるもので長次は贋物を二つ作つて二つ乍ら河内山に渡し、最初見本に預つた純金の瓶子は自分が取つて是が一つあれば一生遊んで喰へると納つて居た。其筋では開んな事は露知らず、賭場の手入をして長次を引致し家宅搜索をすると、三つ葵の御紋のついた純金の瓶子が現はれたから大騒ぎになり、宗俊の悪事が端なく發覺した。そこで係りの奉行はお時計の間へ宗俊が納めたといふ贋物の瓶子を取寄せ、長次の宅から

引上げた物と比べて吟味に及ぶと、意外にも長次から押収した方が贖物で、お時計の間から取寄せた方が純金であつたので長次も奉行も開いた口が塞がらなかつた。河内山獨り「どうだ馬鹿共が」と心中に冷嘲つてゐた。

初め河内山は銚屋長次の参考人として調べられた時、最早や死ねぬ所と觀念はしたが、一旦放還されたのを幸ひ、向島の寮へ駆け込み事情を打明けて中野碩翁の袖に縋つた。そこで碩翁は係奉行へ書面で長次から押収した金瓶を二見致度いと申込み、河内山の手許にある贖物とすり換へて返却し、眞物は即夜河内山の手でお時計の間へ納めて置いた。次の場面で碩翁が嫌疑を受けねばならぬ事も初めから判りきつてゐたが、併し碩翁は自分の權柄を過信し「知れても大丈夫」と思つてゐた。然るに老中牧野出羽守忠雅が直々向島の寮へ微行して夫と無く自裁を勧めて歸つた。碩翁「他の爲に飛んだ事になつた」とブツ／＼云ひながら其夜更に腹を切つた。

河内山は改めてお坊主頭澤左近將監同道で奉行榊原主計頭の取調べを受け傳馬町の牢屋敷へ収監された。爾來數ヶ月の間に度々取調べを受けたが二十八箇條の罪状悉く申開きが立つた。強ひて詰めて行くと思はぬ方面へ事件が擴大しうで奉行の方が危くつて仕様がな。其頃一服盛と云つた官許の毒殺法で罪のきまらぬま、四十二歳の花やかで腕白な河内山の生涯は打切られた。

名高い雲州邸の強請も、當時の役人は贖物に觸る心持で、河内山が輪王寺宮のお名前でも擔ぎ出さねば好いと恫々してゐた。此話も區々に傳へられてゐるが、下谷お成道の素封家で池田屋喜左衛門の娘菊野（芝居の浪路）が雲州候の上屋敷へ腰元に上つてる間に、家中の好男子須崎要と人目を忍ぶ仲となつたが、豫て菊野に氣があつて、苦しい近う寄れ」と云つても一向近う寄らないので業を煮してゐた殿様は、二人の不義を嗅ぎつけると、自分の不義の遂げなかつた腹癒せに今晚は愈々お手討ちといふ事になり、用人今村周左衛門、目附役河邊内記の名に於て「明朝不淨門から娘菊野の死骸を受取に來れ」といふ通知が父の喜左衛門の處へ發せられた。即座に成敗せじ何時間かの餘裕を存して當人と親許へ通告したのは、殿様としては考へたつもりであつたらうが、其間に菊野が妥協的に思直す事の代りに、河内山が「諾ッ、雲州の野郎ッ」と飛上つて例の大芝居を打つたのである。恰度其日河内山は池田屋へ一局圍もうと思つて出かけるると右の話なので、今の言葉で云へば運動費として二百兩、成功謝金として三百兩出させる約束で、菊野救済の件を引受けた。開して直に機次、金助、丑松、直侍などの乾分を非常召集し、巧みに手を廻して上野東叡山凌雲院大僧正の袈裟法衣を借出した。

凌雲院は輪王寺宮の執事役であつた。凌雲院大僧正の装束も行列も格式でチャンと定つてゐるか

ら芝居で見せるのと大差は無い。即ち河内山は白綾の小袖、二十四襲の緋の法衣に金襴の袈裟を掛け、水晶の珠数を爪線棒駕籠に納まり、先供が二人、籠脇の青侍が二人、夫れに長柄の傘、鉄箱、草履取、杖持、合羽籠など總勢十三人の鶏鳴狗盗いとも真しやかに雲州邸へ乗込み「上野一品親王宮の御使俊雲院大僧正の御入り」と觸れ込んだ。河内山は肚の中で「雲州の野郎！女子供を苛めやがッて」とブリ／＼しながら現在の閑院宮邸なる雲州邸へ籠を横附にし式臺に出迎ふる用人廣瀬美濃、岡本半大夫をどは尻目にもかけずに奥へ通つたのである。开して理由も墓も無い。法親王の思召なれば池田屋の娘菊野を直ぐ親許へ歸し遣はすやうに申入れたが、松平家では疑念を起し廣瀬美濃が早馬を飛ばして上野の輪王寺を訪ひ實否を質すと、菊野及河内山を助ける爲め宮の仰せとして「如何にも當方から使僧を出した」とあつたので、河内山は虎口を免れし上に齋料として松平家から百兩出させ今しも立關へ出やうとするところを豫て見知越の供頭遠藤佐十郎が見つけた遠藤から重役の三浦和泉に「お敷寄屋坊主の宗俊といふ悪黨です」と耳打したから三浦は前後の思慮も無く「河内山宗俊待てッ」と浴せた。河内山はギョツとしたが「何事にあや僧侶の身には物驚せらるゝなり。實に武士といふ者は荒々しき者にこそ」と慌けやうとしたが慌け終せないで、

彼の有名な喉阿を飛ばし、河内山が決して河内山で無く飽くまで凌雲院の大僧正たる事を認めさせ悠然と引揚けた。池田屋夫婦と菊野の喜びは云ふまでも無い。河内山は半日の大芝居で成功謝金三百兩を贏ち得て是又大した功德を施したつもりである。

斯うして集めた悪銭を彼は乾分の爲に惜氣も無く散し、酒と女には比較的冷淡な代り、美衣美食に飽き普請道樂では大名も及ばぬ贅を盡した。現存せる河内山の跡を見すれば彼の建築趣味が如何に江戸前だつたか判る。六疊の居間の床柱は直径三寸程の皮附の如輪木で、天井は糸柱とアラ、ギの板を縞目に張つて、夫に南天を手斧刻みにした眞四角な棧を三寸隔位に打ち、床脇の壁に開けた一尺四方の窓と縁側寄の壁に開けた丸窓には、共は埋れ木のやうに黒光りする薩摩竹で枠を取つてある。又維新後までも其儘になつてゐた河内山の門は、江戸中探しても無いと云はれたほど目の細かい薩摩の杉柱で、其門が取拂はれて後も門材は永らく雨曝しになつてゐたのを、今の河内山の主人が障子の腰板に作らせた。河内山の女房及彼の墓面に並刻せる「光岳院法柏童子」といふ子供のは傳はらないが、直侍の方は十里四方江戸を構はれ（追放令）後衛に江戸に入込み、九段中坂で飯屋を出してゐるうち微罪で擧げられて小塚原刑場の露と消えた。千住同向院なる片岡直次郎の墓は三千歳の寄進である。三千歳は明治年間まで生残り、九十近い年で直さんの側へ行つた。



扇雀君に寄す

山本修二

本誌の編輯子は、私が君に公開状を發すべきことを命じた——ひどく直譯めいた書き出しであるが、これは編輯子が、いつも原稿を書くのに、二日以上猶豫をくれないために、私の魂が「書齋」から「街頭」へ歩み出る餘裕がなかつたからである。私は今十九世紀末の英國劇壇に燦然と輝いたヘンリー・アアキングの研究を續けてゐる。ライシイアム座華やかなりし頃の夢に浸つてゐる私が、突然「道頓堀」のわが「Sei Rock」に呼びかけるのだから、直譯口調もやむを得ない。

ヘンリー・アアキングは、彼の後に起

つて「近代劇運動」の爲に完全に埋没された。しかし昨年頃から、再び彼を追慕する聲が、「近代劇」を壓倒しようとしてゐる。これは何を意味するか？「俳優の藝術は、彼の肉體と共に滅びる」この言葉は或る意味に於て眞實である。しかし彼の「個人としての藝術」は滅びても彼の「発見」は「原則」は「傳統」としての藝術の中に不朽に生きる。

今や歌舞伎王國の混亂の中に立つてゐる。多分これは歌舞伎が、創始以來かつて経験しなかつたほどの危機である。この危機に立つて、余りにも鋭敏な感受性

を惠まれた若き君が惱みを想像するとき私は憂如としてゐることが出来ない。私の差しのべる手は、余りに弱い。私の呼びかける聲は、余りに低い。しかし私の低い聲から、明敏な君は、きつと何等かの暗示を掴み出すに相違ない、この點については、私は君に失望してゐない

歌舞伎は没落する!! この聲は幾度か聞かれた。しかし事實に於て没落はしなかつた。しかし今度は没落する!! 或ひはさうかも知れないが、先月の京都座における君と、君と先輩との一座は満員續きだつた。これは問題ならぬほどの小さな「例外」であるかも知れない。しかしあの京都座は、最も大衆的な劇場である。即ち「大衆」はまだ歌舞伎を見捨ててゐない。その同じ「大衆」は、映畫俳優がスクリーンを投げだして「實演」すべきことを命じてゐる。これは阪東壽之助君に皮肉を言つてゐるのではない。今月の淺草を見よ。

「民の聲は神の聲」、古い諺である。こ

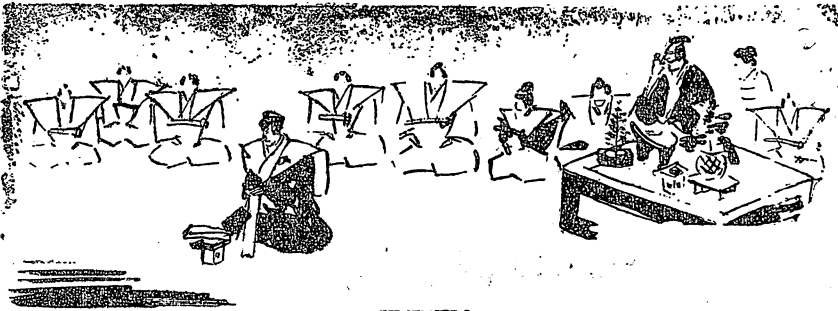
れは藝術の傳統のやうに古い謠である。藝術の傳統の古き、この事は、歌舞伎俳優である君が何より先に知つてゐる筈だ。神樂殿が能舞臺に變形するまでには幾百年を要した。能舞臺が今の劇場に移るまでには、又もや幾百年を要した。その「進歩」は遅々としてゐた。しかしそこには確實な「進歩」があつた。十九世紀の近代劇運動はそれ以上の「進歩」を一夜の中に達成してそれから「退歩」を續けて行つた。そして今の英國劇場は、ヘンリー・イアキングから出直さうとしてゐる。通俗な喩を引かう。昔の東海道の旅人の歩みは遅かつた。しかし確實に江戸の方へ向つてゐた（昔は地球が平面だつたから）。現代の世界一周飛行機のスピードは早い。しかしそれは確實に出發した地點へ戻つて来る。活動寫真からシネマへ、それからトオキイへ、最後にテレキジオンへ、それは結局「演劇」への後戻りだ。イブセンからラインハルトへ、ラインハルトからメエエルホリドへ、それ

から歌舞伎へ。だから賢明な「大衆」は決して歌舞伎から離れない。

嚴密に言へば、この世に進歩といふものはない。ただ「成長」があるばかりだ。超特急「つばめ」號の速力は早い。しかしその乗客の「成長」は、少しも早くなるものではない。今はテムボ、混亂、ジャズ、アデプロの世の中である。が「人類」はどれほど「成長」したか。「成長」は時間を俟たなければならぬ。時間とそれから成長せんとする意志——決して「進歩」しまいとす意志——これが何より大切だ。

（しかし「歌舞伎」は滅びるかも知れない。「歌舞伎」が滅びて、何の「成長」か？）かういふ不安が、或ひは君の頭を掠めるかも知れない。しかし「歌舞伎」の外に、何處に君の生きる世界があるのか。百姓か、労働者か、商人か。君の先輩には、かつて「後藤新平以上の政治家」と呼ばれたが人ゐる。今でも「〇〇〇〇以上の實業家」があるかも知れない。だが、君は「政治家」でも「實業家」でも

ない。一個の「歌舞伎俳優」にすぎない（幸ひにも!!）。君の「藝術」に精進し、その「成長」を大成する外に、どこに君の生活があるのか。「歌舞伎王國」を死守する外に、どこに君の使命があるのか。これは明敏な君の、夙に知つてゐる所である。が、君の周圍に、或は「進歩」の亡靈に惱まされてゐる若き友達があるかも知れない。さういつた友達に、どうか私の意味する所を傳言して同志を結束してほしいと思ふ。私の公開狀が余りにも概論に終始したことを遺憾とするが、今の世の中に、必要なものは、「性根」である。その他の細かい問題に至つては君と、君の尊敬する野淵氏と、それから僕と、鼎座の時に譲りたい。野淵氏は多分新劇指導者としての立場からも君の進むべき道について、語るべき多くのものを持つてゐるだらうと思ふ。私のいふ所は「書齋論」だ。或ひは「書生論」であるかも知れない。それは十二年の友誼に免じて許してほしいと思ふ。



舞	紙
臺	上

中座十一月狂言

時今也桔梗旗上

松香花蝶

水色の桔梗の定紋を染めた幔幕が風に少し動いてゐます。世尊寺殿を饗應しようといふ小田春永公の上意を蒙つて、武智日向守光秀が饗應使を命ぜられた即ちその饗應の假御殿の場で幕……。

御料理役の山口玄番なる侍がその忙しい最中に戀の料理にかゝらうと、光秀の妹桔梗を口説いてゐます。

「是は桔梗どの、秋の盛りのその花を、あの藤袴の關丸に咲かそうとは胴慾ぢや、拜む拜む」

とははは刀にかけての亂痴氣です桔梗は逃げ廻るはづみに、當日の裝飾に信盛から獻上してある蘇鐵

に袖をからませて、その枝を折りました。さあ事です玄番は戀のかなわぬ意趣ばらしにその罪科を責めます。桔梗は困り切つて懷劍を取出して既に自害に及ばふとする時。

「ヤレ待て、妹早まるナ。饗應使武智光秀疾くよりは是に罷りあるワ」

正面の御簾がするくと巻き上ると烏帽子大紋の光秀が配膳を前にしての大見得です。歌舞伎の錦はまさに躍り出やうとするところです。

光秀の一言で桔梗は自害を止まり、山口玄番は蘇鐵を持つて下ります。

「春永公のお渡り！」

とあつて北山へ遊獵に行つてゐた春永が關丸その他を引連れて現れます。處が春永の反感をまづかつたのは桔梗の紋ある幔幕です。暴君らしい疥癩がまづ筋を立てます。次には過分の饗應振りがぐつと来た。何しろ光秀が全財産の二分の一を費したといふ器物なり山海の珍味ですから眼を驚かすものがある筈です。世尊寺殿は中納言で春永は右大臣です。言はゞ眼下を招くのにこんなにしては今度彼方が招き返す時はどうなる。さては光秀が公家堂上に悪意を結びたいための饗應かと春永は怒り出しました。光秀は困りました。何かと申開きをするが斯うなると主君たるものゝ威嚴上引込みがつかない。そこへ春永は短氣で粗暴な人であつたから堪まりません。「關丸彼が生き面を打ち搦へ……」

といふ處まで行く。上意を畏むと

いふ譯か上意に事を寄せて打つのか種々の解釋はあるでせうが、蘭丸が「上意」といつて陣扇で光秀の面を打ち要て眉目を傷つける「ぶつ」と光秀が額を押へると

筆に塗つてある一文字の紅が額に移る。口惜しき思ひ入れ大きくあつて、大向ふより大喝采！

響應の役は蘭丸に、光秀は目通りかなはぬ領地へ歸つて蟄居せよ全く氣の毒です。その上に君臣の禮をわきまえよといふて威張つて

阿々大笑し得られた戦國時代の主人は全く恵まれた人間でした。君を守り御悪み猫も深き故によ

り……
光秀はきつと春永の立去る方を見送つて額を割つた銀扇を開いてさも口惜しげにばらばらと切り破るのです。

二

所謂「馬盤の光秀の馬盤の場です。本能寺の客殿で金地に蓮の襖が奇麗に光つてゐます。日和上

人に出迎えを向けた春永は蘭丸を始め園生局、矢代條助、中尾彌太郎、淺山多惣などを引具して堂々と現れます。

「流石は寺院の物辭かに蓮の白玉池の水草さながら七寶の霞とあやまたん。庭にそよぐ松風は伽陵頻迦の聲にもたとえん。はて面白の景色ぢやな……」

全くのどかなもんですな。そこで酒の肴に臣下から到来の品調べがありませう。馬盤に錦木を轡止に

活けたのは久吉からので、卑下から身を起して今では中國征伐の大將となつてゐる事を象徴したので

そうで春永公御機嫌です。處が妹の栢梗の持参した光秀の悪い。花籠に紫陽花が活けてあつて

畫顔を根に添えてある。畫顔の源氏の中に入らざるは花の赤きは平家なるらん」といふ心で平氏

出身の春永を畫顔に例へて、紫陽花の色にうつり行く姿を生けたのは調伏したのだと怒り出した。こ

りや仲々七難しい解釋で昔の作者が學者であつたことをよく物語つてゐます。何にしても光秀のだと思ふと悪く思ふ。勿論自分を殺す人間だから憎い。憎むから殺されたのだ。これはまあお委せするとして、一同から散々に詫言を言はれて春永公光秀を目通り許すことにする。

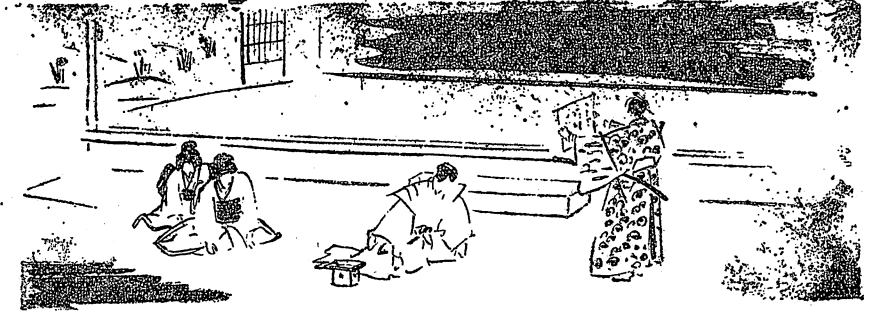
光秀は大喜びで出仕した。春永は盃をくれやうと馬盤に眼をつけた。

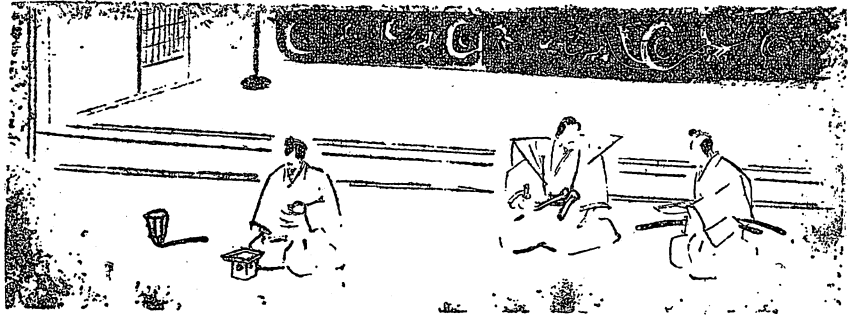
「其方には分相應のその馬盤、馬に與えるその盃、鼻つらさし込み、ずつと干せ」

光秀じつと思ひ入れあつて、「君、君たらずとも、臣、臣たらざる此光秀、思召の盃、頂戴致すでござりませう」

「はりまや」「大統領」うるさいことですがもう一度書きます。こゝが馬盤の山です。あの名調子を張りあげての大芝居、全く歌舞伎は斯うした名優のある限り萬々歳で

……





す。

春永公光秀を散々に辱かしめた上て中國へ出陣して久吉の下知に従へと命じます。光秀あまりの沙汰に驚きます。春永は光秀の妹を所望して斷られたのに拘らず光秀を主君に取なした蘭丸を褒めて褒美を望めと言ひます。蘭丸こそぞと父親森三左衛門の舊領の地江州志賀郡を賜はりたいた望みます。その江州丹波こそ光秀のいまの所領なのです。春永は思惑ありげに光秀の顔を眺めます。更に光秀が懇望してゐた。齋藤道三より傳はる日吉丸の名劔を中尾彌太郎に與え、光秀には白木の箱を與えます。その白木の箱には女の切髪が這入つてゐた。その黒髪には次の挿話がある。

光秀が流浪して越前に忍んでゐた頃珍客があつてもてなしの金につまつた時、妻の皐月が旅商人に黒髪を切つて賣つて金にかえた。その商人が春永の間者で、それに

認められて光秀が春永に隨身して今日近江丹波の大守となつたのです。そこで昔の因縁つきの黒髪を光秀に與えて改心せよと命じます。光秀は有難くその箱を頂戴して小脇に抱えて花道へと引込みます。その七三でのきつとした大見得また大向ふから「はりまや」「大統領」の連發です。

三

愛宕山の旅宿、連歌の場てこゝが「時は今、天が下知る皐月かな」つまり「時今也桔梗旗上」となる譯です。

光秀の妻の皐月、安田作兵衛、連歌師紹巴、それに妹の桔梗などがまさに旅宿のつれづれに連歌をして主人の歸りを待つてゐます。紹巴は盛んに春永公の悪口を言つて光秀を氣の毒だとかばひます。その對照は猿面冠者久吉である事は言ふまでもありません。そこへ光秀が歸つて來ます。白木の箱がもの／＼しく抱えられてゐます。

光秀は作兵衛を呼んで、中國政めの後詰を頼つたが許しが出なかつたから本國龜山に引上げる用意をするやう命じます。更に光秀は妻の皐月を一人召して白木の箱を見せ本能寺で滿座の中で恥辱ある昔がたりをしられたことを言ひます。夫婦は今を忘れかけてゐる流浪時代を思ひ出した「私の黒髪があなたの出世の種となり今は御身の仇となり、滿座の中で……もし、我夫」

「奥、皐月せまじきものは」「宮仕へぢやなア……」

こゝへ紹巴がよこ／＼と現はれてまたアジルののです。春永公は猿冠者の言葉ばかり用ひてゐる、そんな主君に仕えずとも、いま逆意を企て裏切りすれば天下はあなたのものといふ紹巴を光秀は抜討ちに切り殺します。そこへ淺山多惣、中尾彌太郎の兩人が春永公の上意を傳えます。壘の上に血汐の飛ぶのを見て不審

に思ひます。一陣の風が燈火を消します。

「爰は所も愛宕山木の間を洩れし夜半の風、庭前より吹き來り燈火一時に、はて折悪い」

と光秀はそのひまに衣服を改めま

す、灯が點くと無紋の上下に腹切刀

が三寶にのつてゐ

ます。妻皁月を始

め驚きます。光秀

は既に上意を知つ

ての覺悟でした。

「先達其方軍功

に由つて近江丹

波の二國充て行

ひし所此度仔細

有之右兩國故な

く逐上いたすに於て替地として

出雲石見の内望みの地差遣はさ

るものなり。

光秀の先見の明は當つておまし

主なる配役

本能寺客殿の場
住職 日和上人 三喜三郎
所 化 時三郎
同 小田上總介春永 友右衛門
森 代 丸 好太郎
矢尾彌太郎 七三郎
長尾彌太郎 三三郎
淺山多惣 吉之丞
丹羽久四郎 梅藏
奥方 園生の前 時藏
光秀 桔梗 榎之助
森 力 丸 三津之丞
奥女中 田每 吉右衛門
武智日向守光秀 吉右衛門

愛宕山旅宿の場
武智光秀 吉右衛門
安田作兵衛 力藏
淺山多惣 吉之丞
長尾彌太郎 七三郎
連歌師宇野紹巴 若猿
奥方 みさほ 秀調
妹 桔梗 もしほ
近 習 時次郎
同 播 次郎
同 四天王 但馬守 三津五郎

た。最後の願ひに自分が懸望して得られなかつた名劔日吉丸で介錯願ひたいと中尾彌太郎に頼んで辭世の一句を主君へ披露してくれと白扇に書きます。

「時は今天が下知る皁月かな」

まり此山内に集ひし軍勢本能寺を十重二十重に追つ取り巻いて大音上、今日今宵春永公の旅館を眼がけ推參せしは武智日向守光秀が下知を受けたる雜任勢、御大將の御首しを申し受けん」と光秀軍有利の報告です。

光秀は喜び勇んだ。

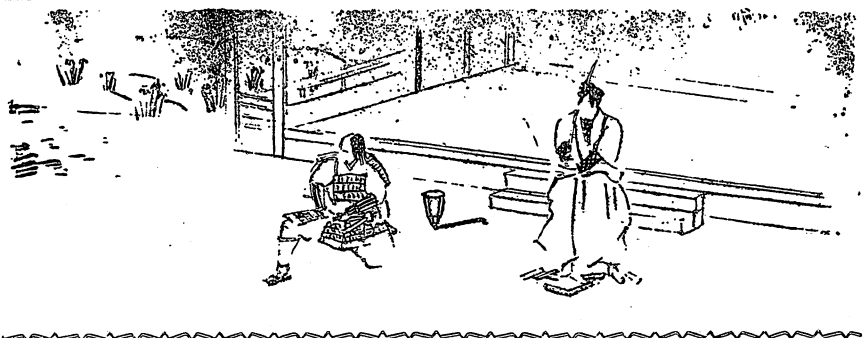
「思ひたつた大望を女童にいひ聞かさんや」

淺山多惣が「光秀觀念」と斬つてかゝるのを「出陣の血祭」と斬り下げた光秀は「馬引け……」と大きく叫びました。

光秀の腹に立つと思つてゐた短刀は淺山多惣の胸に突きさされた。惣とりして立かゝる中尾彌太郎を一刀で斬つた光秀の眼は幾日ぶりてか晴々と冴えて輝いた。

「御注進々々々、主君の御下知長

× × ×



紙 上
舞 臺

中座十一月狂言

河 内 山

一幕三場

琴唄で幕が明きます。と松江侯の奥座敷です。舞臺一面に薄紗を敷詰であつて、正面上下とも銀地に草花を畫いた襖が建て連ねてあります。

早舞の鳴物になつて、奥の襖を明けて美しい腰元浪路が逃げて出ます。と姉から松江出雲守が大刀を引そばめて追駈けて出る、續いて宮崎數馬が殿を留めながら現はれます。出雲守は浪路に想ひを寄せたのですが、浪路が心に隨はないので手討ちにする。と云ふので、浪路は死ぬる覺悟ゆへ御前の御手に掛かると云へば、數馬はそれを留どめますので、今度は數馬も俱に成敗すると出雲守の怒り聲です。

重役北村大膳が暫らくと聲をかけて出て、仔細ありげに數馬の罪を糺した上御成敗あれと云ひます、數馬は不審に思つて「拙者の罪を糺すとは」と訊けば、「御身の罪は外ならず、それなる浪路とかねてより、不義を致してござらうがな……誠の道と思ひなば腰元浪路をお執持致すべきを、かばひ立て、妨げるとは不義の證據」と數馬に問ひ詰る、が覺へのない數馬はいつかな背かず身の潔白を辯明して詰めかけます、大膳と數馬は次第に言葉戦ひが激しくなるので、出雲守が制して、數馬に改めて不義の次第を詰問に及びます、數馬は何處迄も無實を訴へます。

老女岩崎が現はれて、これも大膳と同じやうに二人の不義を言ひ立てるので、出雲守は威高に「大膳岩崎より訴へ出てし不義の科、言譯あらば申して見よ」と屹と言ひます、と揚幕の杉戸の中から「御返答申上げるでござりませう」と聲をかけて家老高木小左衛門が花道へ姿を現はします、そして舞臺へ来て、岩崎を尻目にかけて「我君あなた様はなあ」と強く云つて君へ誠言をするのです、出雲守は不興氣に「返す返すも憎くき奴、それ大膳斬り捨てい」と憤怒の聲音。はつと大膳が刀の柄に手をかけた時。

「唯今上野宮様より御使僧御入來にござります」と近習が報ずる。詮方なく一同争ひをやめて「先觸れも無く上野より當家へ使僧を立てられしは」と不審の眉を擡める出雲守、急に面會せぬと言ふのを小左衛門はたつて出迎へよと諫め

樂屋話

新聲劇 その二

X Y Z

てんまど



吉田正雄 君は第一 劇場てウ ンと腕を みがいた

ハタ丸さん

れば「使僧に逢ふは面倒ぢやわ」と強く言ひ捨て、奥へはいります。大膳、岩崎は減らず口を叩いて引込みます。

跡に浜路と數馬は小左衛門に危難を救はれた禮を述べます、小左衛門は使僧の來來は何事なるか案じて、殊によれば何事も我腹一つに引受けてと意味あり氣に「思案の極意」はと扇で腹を斬る眞仰をして見せ扇を下へ置くと折の音、

「外に御座らぬ」と深い心の底を兩人に飲み込ませる模様で舞臺は廻つて行きます。

松江家の廣間で「御使僧の御入り」と長く引張つた呼び聲が聞えます。と、花道から上野の使僧と化け澄ました河内山宗俊が緋の衣に錦の袈裟、珠数を爪繰つ

て悠然として現れます、上手から小左衛門、數馬、近習四人が出迎へます。「宮の御内意承はり罷り越したる拙僧は北谷の道海と云へるもの



候は何故此席へは見えられませぬなど不審を咎めます、小左衛門が折悪しく不快に付き御門主よりの御沙汰の儀は、主人の名代拙者めに仰せ聞けられ下さりませう、と云へば河内山は面會ならずば是非がない事、この儘立歸つて宮へ言上すると立ち上りますので、小左衛門等は狼狽して暫時御猶豫をと願ふ處へ正面の裨が左右へ開いて松江出雲守が現れます。

各方の御出迎ひ近頃以て大儀至極」と如何にも上野の宮の使僧らしく澄んだ聲です。そして静々と座に通ります。高木を始め一同名乗りを上げると、當家の主人松江

河内山は「おごそかならぬ宮の内命御家老はじめ各方には暫時退座致されよ」と小左衛門始め數馬、近習等は次へ立つて行きます。出雲守は内命の趣を尋ねます。



芝田君の仇名を書く時、ハツタリの外に新樂

さんといふのがあつたのを忘れてゐた。新樂さんなんてまるで萬歳師のやうだといへば、だからさう附けたんだと誰かといふ。「旅鴉一本刀」でこの新樂さんと波多稷君が流れの旅人をやつて盛んに各場を浮かしてゐる。笑はせる役である。彌次喜多以上に飄輕な所を演じるから、波多君もハタ丸さんと呼ばれてゐる。

水雷俊



水雷艇のやうに敏速であるから、山口俊雄君の事をさういふのだらうが、こ

「使ひに立ちしは外ならず、當家の奥を勤め居る腰元浪路といへるものを、速かに宿元へお下げあるやう御門主より内命請けし此道海（と出雲守が驚くのを冠せて）唯かやうにのみ申しては仔細もお分りあるまいが、豫て御門主には圍碁にお心寄せ給ひ、日毎に出るお對手の骨董家和泉屋清兵衛と云へるもの、宮と相碁に勝敗も互角に打出る者なりしが、彼が縁家の一人娘、三ヶ年以前に御當家に罷り出し給ひ、縁邊極はり宿元より度々御暇願ひに出れど、何の御沙汰も無く、如何なる落度有つての事か、一問へ押し込められ、既に一命旦夕に迫りし程の憂難義、彼の清兵衛が物語りを、聞き召されて御門主にも、少女を不憫と思召され、其方參つて松江侯に相談なして少女が一命、無事に助けて連れ歸れと内命蒙り參りし道海、何卒御承知下されり」

との内命を聞いた松江侯は、浪路の事て恐れ多い手敷をかけ却てその親共を憎みます。河内山は猶も重ねて助命を懇願するので、出雲守は折角だが承引出出来ないときつぱり云ふので、はて敷かはずしい御返答と重々しく「僅か婦女子の事よりして、此の松江家の輿廢にも拘はる大事が出来なすが、それでも御承知ござらぬ」と脅しかけます。詮方なく出雲守も、是しきの事て公の沙汰にするのも好もしくないと、漸々浪路に暇をやる事を承諾して奥へ這入ります。

近習が二の賄付きの膳部を運んで響應さうとするが、河内山は是を辭退して「相成るべくは山吹のお茶を一服所望申すと、御重役へお傳へ下さい」とそれとなく黄金の馳走を請求します。近習が心得てはいると、數馬が白木の臺を捧げて出て「扇子一對御受納下さるやう」と差し出します。「これは扇子なりと仰せあれど見受けし處目録包み」と意外の思持「はつこれど黄金の山吹を畫きましたる天地金」と數馬の詞「いや痛み入つたるお計らひ」と快よく請けます、そして上州屋の娘は駕籠の若侍に即刻送り届けるやうと傳言を頼みます。數馬は下つて行きます。河内山は四邊を見廻して、例の目録臺を持上げてニツタリする時時計が鳴り出すのでハツとなつて手を膝へ置いて澄ました顔。道具が廻つて行きます。

松江家の支關先です。御使僧のお立ち、との聲に仲間が出て河内山の草履を揃へて平伏する、と辭々とし歸りかける河内山、まだ落付き拂つてゐる。後から「御使僧暫らく」と大聲に呼はつて大膳が追つて出ます、そして自分の名を名乗つた上、吹めて御使僧の御尊名は、と尋ねます。河内山は

それは少し認識不足な仇名である。決して彼は水雷のやうな早業で女を口説いたこともない。女にかけては至つて親切である。手出しな人かも滅多にすることではないだからスピードの掛らないことおびたゞしい。端で見てゐるのも腹立たしくなると誰かどいふ。果してそんなにお優しいか何何かは保證の限りでないが水雷艇ではないよ

花王石鹼



道頓堀角座前の巡航船乗場河岸に花王石鹼の電氣廣告が新設された。赤青白と明滅するその石鹼の廣告には三日月さんに目鼻のある顔がこれも點滅してゐる。角座出演申はその廣告燈が樂屋からよく見えるので、物好きなのが和歌浦子千君を

北谷道海だ」と云ひますと「いつ
 お手前は茶道を脱し、沙門の道へ
 お入りありしぞ」と大膳の詞に河
 内山はぎつくりしたが、左あらぬ
 體で覺えないと云ふ「おとぼけあ
 るな宗俊どの、日頃お
 城の使ひを勤むる、此
 大膳を見忘れしか、お
 數寄屋坊主の其内でも
 頭と呼ばれる、河内山、
 何んで身共が見違へま
 せうぞ」と大膳が云ふ
 が河内山はまだ素知ら
 ぬ振りて覺えないと云
 ひす「如何程しらを切
 らるゝとも、脱れぬ證
 據は覺えある、左の高
 頬に一つの黒子、何と
 相違は御座るまい」河内山は「う
 む大膳には知つて居たかハ、
 いかにも使僧と偽つたは河内山宗
 俊だ」と本性を現してしまひます。
 「悪に強きは善にもと世の譬に



これこそ旭將
 軍木曾義仲公
 の御公達駒若
 君、斯く申す
 某は、樋口
 の次郎兼光な
 るわ

も云ふ如く、親の歎きが不憫さに
 娘の命を助ける爲、腹に巧みの魂
 膽を、練堀小路に隠れなき、お數
 寄屋坊主の宗俊が、天窓の丸い
 幸ひに衣でシガを忍ぶが岡、神の

ころへ北村大膳……そつちで歸れ
 と云はふともこつちで此儘歸られ
 ねえ一
 若年寄へ差し出すか、但しは御
 使僧で歸すか返辭をしると云ひま
 す大膳は首を打つ
 と云ひます。河
 内山は御直參だ自
 由に此首は落され
 ないと云ひます、
 大膳はしからば上
 へ差し出すと云ふ
 と、河内山は更に
 舌三寸で知行高に
 疵を付けるが承知
 かと云ふので、大
 膳はぐつと詰つて
 刀の柄へ手をかけ
 ます。奥から高木小左衛門が出て
 使僧へ對して無禮だと大膳をたし
 なめ、河内山に向つて相違あらざ
 る使僧ゆへ此上共に御内分にと云
 つて、イヤ何分共に御前よろしく
 といふ。

捉へて「君の姉さんが向ふにゐる
 よ」といふ和歌浦君すまアした顔
 をして「へい、私で出来た日
 から承知して居りますよ。」
 磯邊奈美
 子君、こ
 の人はま
 だ一座に
 入つて間
 もない新女優である。和歌浦君の
 お弟子さんである、見るからに現
 代エロを代表する様な肉體の持主
 たゞ玉に瑕は少し首が短いこと
 ある。長いのはろくろ首で高物行
 だが、そのあんまり短いのも難で
 あるいつか樂屋で毒本さんの藤本
 君が「河馬」と云つて「あなたツヅ
 るぶん失敬ね」と叱られてからは
 彼女の仇名は目下の所何とも附い
 てゐないさうである。



吉右衛門の馬盃の光秀

森 ぼ の ぼ

吉右衛門はクラシカルな歌舞伎向きの役者と目されてゐる。それはさうに違ひない。吉右衛門自身もさう許してゐるらしい。だからと言つて、新しい芝居の出来ない役者ちや決してない。山本有三氏の「同志の人々」の田中河内之介などは、豫期以上の——と言つては失禮かも知れないが、兎に角素張りしい出来榮えで、當人も大變氣乗りのした役であつたらしい、併し、彼としては、過去の名優達に依つて一分一厘隙の無いまでに整理され磨き上げられた古典劇を更に自分のものとして演出することは、新しい芝居をや

るよりも、いつそ努力の仕甲斐があると思つてゐるのである。歌舞伎には既に完成された「型」がある。或程度まではその境域から、その束縛から脱れることが出来ない。或はそれ以上の「型」を編出す餘地が無い。だが新しい芝居となると、自由な工夫、独自の解釋が容易く許される。それだけに、彼にとつては手ごたへが少く、折角の力試しに物足らなさを感ずるのであらうと思はれる。實際、彼はクラシカルな型物に、技と腹の一致した、力強いシバキを見せてくれる。今度の「桔梗旗擧」の光秀がその一つだ。この光秀を最初演じたのが、仁木や時平公で「古今無類」と評された、恐ろし

く鼻の高い、眼玉の鋭い五代目松本幸四郎だつた。文政三年大阪初上りの時にこれを出したが、愛宕連歌で、三寶刺りの見物が物凄く、見物の子供が泣出した程であつたと言はれてゐる。近世では九代目團十郎、團藏がお得意で見せた。兩優の演出に多少の相違はあるが、大體に於ていづれも幸四郎の型を傳へてゐるのであらうことは想像される。

團十郎の型を踏襲してゐる中車には、やはり豪放さがあり、反諷氣を起し易い資性が肩宇の間にほの見えてゐる。團藏型に依ると言はれる吉右衛門には逆境から歪められたかのやうな依怙地さ、陰忍

的な昂奮が何處かに潜んでゐる。彼は癡固した冷さと、底光りする凄さとを持ち、これは冷静を装つた熱情、粘り強い執着を匿してゐる。(抽象的な言ひ草は止めて舞臺を觀よう——)

今度の芝居ではのツけに馬盟、それから三寶割りと二幕だけ見せるらしいが、光秀の反謀心を強調する上からは、やはり響應の場が序幕にある方が効果は多いが、時間の關係で省畧しても、さして口惜しい程のものぢやない。見せ場はやつぱり後の二夕暮だ。

先づ春永に呼ばれて、お約束の紫の着付、社下で光秀がツカツカカ道へ出る、春永を見て腰を三ツに落して目禮する。(シバキは既にここに始まつてゐる)不興を赦され、目通り叶ひ、喜ばしいかとい訊かれて、「こは仰せとも存じませぬ、これまで數ヶ度の御出陣、烈しき火急の軍たりとも、君の御側立去らず、軍功を勵みし光秀、聊か御不興蒙りて、御前を

遠ざけられしこそ」とサラサラ臺詞を運んで置いて、「この身にとつては魚の水を失ひ、鳥の卵を焼かれし如く、しーん——た——い途を失ひし折柄」と沈痛に「今日只今御免のお召しは、誠に氏神の加護、弓矢の冥加に盡きざるところと、いかばアかりイか」と一息毎に熱情を縮めて行く吉右衛門の抑揚の巧さ、見物はただ寂然たらざるを得ないであらう。本舞臺へ這入ると、聽て馬盟の件になる——。(錦

木を活けた馬盟、響留めにした轡の活用は、大南北の巧妙な作劇術だ)光秀が思入れあつて馬盟の杯を取上ける。春永と見合つて一寸極り、春永が「魏の茫睡」と臺詞を冠せるのがキツカケで、鈴の這入つた音楽の鳴物になる。——かかる歌舞伎獨特の情趣に見物の胸はどよめくのである。馬盟の故事から中國出馬、舊領没收の件があつて、愈々シバキは高調に達し、切髪の條になる「我君よりの下され物、一軸なりと仰せあれど

箱の内には女の切り髪」と審るので、春永がその切髪の由来を語る「すりや、この切り髪は越路にて、光秀流浪のその朝、煙も細き朝夕の、その世渡りに僅かなる價にカカ替へて……」と、光秀の血を吐くやうな、尖锐な語調には、見物もいつか同情の涙に咽ぶ。

嘲笑を投げつけて春永が去り、近習が去り、たゞ一つ蹂躪されずに濟んだ路はたの花のやうな妹、桔梗も、大刀小刀を渡してすすすごと立去る、跡にはたど一人、野中の捨石のやうに、淋しく光秀が取残されてゐる。彼は無意識に刀を挿し切髪の箱を抱へ、影のやうに立去る時、響の音に始めて我に還る。抑へに抑へたる悲憤が胸先へこみ上げる。どうともなれ！箱をしつかと抱へ直して足早に……姿は揚幕に消えても、魂だけは未だ花道に、幻となつて残る心地がする——。

(反逆者光秀と描いたラスト愛山も感激的なシーンだが、筆者健康を少しく害してゐるから、省略させて頂かう)

— 21 —

×××××××××

子母澤寛氏點描

渡邊均

×××××××××

子母澤寛氏は、同じ社にゐて同じ仕事を
をしてゐるので、始終大に交渉があり、

手紙などは、ひっきりなしに往復してゐる
譯なのですが、子母澤氏は東京にゐる
し、私は大阪に住んでゐますので、去年
の秋が今年の春か、どっちだつたか忘れ
ましたが、子母澤氏が下阪して來た時會
つただけで、人間的には殆んど彼氏を存
じ上げません。

たゞその時の初對面の印象は、落語家
の春風亭柳橋によく似てゐると思つたこ
とでした。柳橋をもう少し肥らせたなら子
母澤氏にそっくりだと思ひました。そし

て、實に江戸ツ子らしい人だと思つたの
でした。

その上、子母澤氏は、實に話上手であ
ると同時に、中々聞き上手でもありま
す。苦勞人らしいところも多分にありま
す。私は、大に共鳴した次第です。
ところが、甚だ残念なことには、氏は、
ちツとも酒を嗜みません。最初ツからソ
ーダ水とかサイダーとか、そんなものば
かり飲んで、いつまでもスメンですから
私のやうに話下手で酒ばツかり飲んで
ますと、どうも、はじめから終まで酔態
を監視せられてゐるやうな氣がして、參
つてしまひます。

つてしまひます。

大體、私は、酒を飲まない相手には、
全く參つちまふ傾向があります。相手が
酒飲みであればあるほど、大變氣がラク
になるのですが、相手が飲まないとい、た
どうも、どうして、のか迷つてしまふ
のです。

子母澤氏は、ちツとも飲みません。
一見、大酒家らしい風貌を備へてゐるな
がら、ちツとも飲まないのです。私の子
母澤氏に對して残念に思ふのは、その點
です。

酒の席で酒を飲まない人は、少くとも
私には、惡魔のやうにしか考へられな
い。少くとも私にも、困つた相手といふ
感じですよ。
◇ 子母澤氏よ、少し酒を飲んでくれ！
◇ 子母澤氏のものを読んだ最初は「新選

組異聞」です。

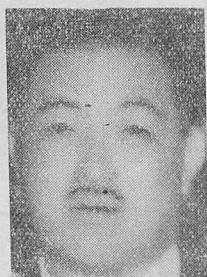
しかし、正直なところ、私は、この「新選組異聞」には、あまり感心しませんでした。但し、この場合、感心といふのは「小説として」です。中々よく調べて書く人だといふことは、大に敬服した次第なんです。小説としては、さほど感心しなかつた私でした。

だが、それは、少しも子母澤氏の値打ちを落すことではなく、もちろん、子母澤氏は、小説として書いてゐたのではなくて、「異聞」は「異聞」で、實話物語として書いたものなので、ちツともかまはないことです。

◇
その後「文藝春秋」にも、かうした物語が殆んど毎号載りました。何とかの聞き書といふのも、毎号連載されました。でも、それらは殆んど皆、いはゆる實話物語です。

ところが、最近の「サンデー毎日」に連載せられた長篇の「彌太郎笠」に至つて、それは、斷然立派な小説になりました。「物語」ではなくて立派な「小説」になりました。いつか長谷川伸氏と話した時、長谷川氏も「彌太郎笠」を大に感心してゐました。

氏寛澤母子



◇ 私、このお正月だつたか東京日日新聞に連載せられた子母澤氏の「華族物語」を読んで大に感心したのですが、小説としては、この「彌太郎笠」を絶讃したい氣持ちです。恐らくこの「彌太郎笠」は、子母澤氏の出世作といつては失禮かもしれませんが、第一の傑作といつて差支へはなからうと思ひます。

もつと失禮な言を許されるならば、子母澤氏は、この「彌太郎笠」によつて、確乎たる小説家としての地歩を占めたといつてもよくなるでせうか。今までの子母澤氏の諸作は、この傑作「彌太郎笠」が出来上るまでの段階であつたに過ぎないのであつて、これを生み出すまでの準備であつたといへなくはないでせうか。

私は、次に長谷川伸氏の股旅物と子母澤寛氏のものとは比較して、その得失消長をも考へて見たく、殊に長谷川氏の最近の傑作「馬頭の錢」の錢太郎と、子母澤氏の傑作「彌太郎笠」の彌太郎とを二人並べて話つて見たいのですが、一寸今忙しくて締切が迫つてゐるので、それは次の機会に譲ることとします。

子母澤寛氏よ、妄言多謝。

（昭和六年十月二十四日大阪毎日新聞社編
輯局にて）



辻野良一

私の調べた投げ節の起源

「道頓堀」編輯部より、此度私の勤めまする「投げ節彌之」に就いて是非とも何か書けと云はれましたので、自分としても参考にもなることと思ひ、一つは興味も手傳つて調べて見ました
投げ節の起源を一寸書いて見ます。

投げ節——と云ふよりは、寧ろ小唄の起源でございしますが、

× × × × × × × × × × × ×

これは可なり古い起源を有してゐる長唄に對する短いものと云ふやうな所から生れたものだからでございませう。

そして、遠く奈良朝の末期から平安朝時代に催馬樂といふものがありまして、それが小唄の先祖だと傳つて居ります。丁度人間の先祖が猿であつたと傳つてゐるやうに——ですが、足利時代の末に至つて、稍々近代的俚謡の形式をとるやうになりました。ですから、直接の起源は、其の當時だと云つても好いだらうと存じます。

其の後三味線が琉球から渡來致しました。勿論現在のとは大分異つてゐますが——兎も角三味線が輸入して、より以上近代味を帯びて來たのであります。

で、近代の小唄は、元龜天正の頃泉州堺の顯本寺法華僧高之隆達といふ人が唄ひ始めたのが始まりで、所謂達節ですが、後、癆瘵と云ふ一種の悪病が流行した折、弄齋といふ人が弄齋節と名付けて唄ひ出し、始めの中は手拍子で唄つてゐるが、後に至つて三味線の伴奏で唄つたと文献に傳はつてゐます。

其の後種々の俚謡は相次いで流行し元祿の頃までには數十種

の多きに達したと云はれてゐます。

徳川四代將軍家綱から五代將軍家綱吉の頃、全國到る所の遊廓を中心にして非常に進歩した小唄が流行致しました。其の最も

代表的なものが、京都島原の投げ節、大阪新町の籬節、江戸吉原の纏節ださうでございます。大阪の籬節は後世に於ける都々

逸の前身だとありますが、就中島原の投げ節は最もよく流行し遂ひには地方の遊廓にも同じやうに群生した小唄界を風靡し全國的と云つても良い位に旺盛を極めて流行したと云ふとです。

稀に相見し浮寝の床の、夢な覺ましど鐘の聲。

松の葉ごしの磯邊の月は、千歳ふるともかはるまい。

これは投げ節の例として書物に載つてあつたものです。ついでに一寸書き添へておきますが、其後投げ節が約八十年の長い間隆盛な勢力を持ち續けて來ました處、十代將軍家治の頃、潮

來節が出現し勢力ある流行を見せ、次いでヨシコノ節、それから都々逸の出現を見るに至つたとの事でございます。

×
斯様にして、投げ節の出處が遊廓を中心にして生れたものだけに、此度私に與へられた投げ節彌之の情緒的演出と一入苦心してゐる次第でございます。

そして、旗本の家に生れて武家育ちの若者が、無職渡世の粹稼業の人間にどの程度迄なり後るか問題で、全く苦勞して居

ります。

眼鏡印
肝油

The advertisement features a central illustration of a glass bottle of liver oil with a label that includes a pair of glasses and the text '肝油' and '眼鏡印'. The bottle is set against a background of radiating lines. To the right of the bottle, the characters '眼鏡印' (Glasses Brand) and '肝油' (Liver Oil) are written in large, bold, stylized font. The entire advertisement is enclosed in a rectangular border.

河内山雑話

高谷伸

大名に對して氣焰を擧げる河内山を、わが事のやうに喜んだのも無理はない。それ以上に、この芝居の好評だつたのは、やはり團十郎の藝である。

默阿彌がこの狂言を書いたのは、有名な講釋師松林伯圓の讀物「天保六歌選」から思ひついたので、河内山はじめ片岡直次郎、金子市之丞、暗闇の丑松、森田屋清藏に三千歳の六人を六歌仙に擬へた長篇を種に、うまく脚色して「雲上野三衣策前」の藝題で發表したのが大當りだつたので明治十四年「天衣紛上野初花」と改題して再演、河内山と直侍の件が殊に好評だつた。

河内山宗俊は、事實、宗春で代々の坊主勤め父は宗榮と稱し宗春は幼名藤太郎、年少から才子であつたが、十一代將軍家齊の外戚として威を振ふた中野碩翁の庇護を受けてから増長し人も無けな振舞が多かつた。

芝居の松江邸に現れる河内山は、上野凌雲院大僧正の公式服裝で、供揃まで規定があるのだが、嚴格に言へば天一坊で有名な節色網代の乗物に先供二人駕脇の青侍二人長柄の傘狹箱草履杖持合羽籠を揃へ駕昇供で十三人の供廻りを従へるのである。

服裝は、輪袈裟に緋の長絹、白羽二重の襟巻、白綸子の三枚重ね、白足袋白の胴着に襦袢、持物は中啓に珠數がお定まりである。

封建時代の世相を見ると、大名に對して小祿ながら直參の旗本の紛争、この旗本に對してはまた町奴の反抗などの事件が隨所にある。これも或種の階級闘争と見る事はできるが、現代のそれが多數を待んで少數の権力者を壓迫するのに較べて、徳川時代の闘争は單身或は少數の者の多數の権力者に對し、豪膽ぶりを發揮する所に大なる痛快味があるのである。

河内山宗俊は直參とはいふものゝ、至つて身分の輕いお數寄屋坊主であるが、單身大名屋敷へ乗込んで、町人の娘を救ひ出しその上詐りを看破されても、堂々とたんかをきつて歸る男らしさに興味がある。

これは默阿彌の作ではあるが、封建制度瓦解後、間のない明治七年十月河原崎座に書卸されたものだけに、世人がまだ大名の勢力を忘れず、寧ろその崩壞を目前に見てゐるだけに

演出上から見ると、時代物と違つて特殊な型といふ程のものもなく、せりふ廻しの活殺に難かしい所のある物である。

此頃では殆んど松江邸では直侍を出さず、出しても幕外の迎へだけであるが、書卸しには奥へも通り、數馬の運ぶ目録包を直次郎があけて「こいつア生だ」といふと、河内山が「これ」と押える。橋が入る。「南無阿彌陀佛」と低く唱える所まであつたと聞くが、團十郎も二度目から獨舞臺で目録の重さをはかるだけになり、終には目録包を一瞥するだけの濫い科に枯れて行つたと傳へられてゐる。

芝居のしどころは、いふまでもなく玄關先きで、大膳から「左の高頬に一つの黒子」と星をさ、れ、思はず左手の中啓を落し、その手で黒子を押え、がらりと世話に碎ける所である。「大膳は知つてゐたのか」の高笑ひになり、宗俊だと名乗り、今度は右手で中啓を拾ひ、「やかましい靜かにしろ」から「かういふ譯だ聞いてくれ」まで言ひ、そこで三曲の合方のかゝりになり玄關に腰ををろし、有名な「悪に強きは善にもと……」のせりふになるのだが、この時代世話の變化、緩急活殺が巧拙の分岐點である。

態度も見顯しからぐつと碎けて、中啓の扱ひ方などもぞんざいになり、中啓で大膳を指したり、自分を指したり、ばち／＼開閉するなど簡單な仕科以外に型らしいものはない。そして高木小左衛門が、御使僧といふことを默認するので、敷

臺前に揃えられた金剛草履を履き、元の悠然たる態度で花道へかゝる。

人によつて異ふのはこの花道である。大膳がイキ込む數馬が止める。松江侯が出る。「馬鹿め」といふのが橋の頭。高笑ひがあつて、向き直つてゆつくり揚幕へ入るのを、一杯に幕を引くのが一つである。

今一つは、河内山の笑ひ一杯に道具幕をひく。普通屋敷窓の幕だが、網代を用ひる事もある。こゝへ揚幕から麻上下の股立を取つた直侍が迎へに出る。娘を送り届けたこと、供方一統へ手當の出たことなどが、ぐつと碎けたせりふであり行きかゝると、直侍が「いけねへ〜あの窓から誰かこつちを見てゐるぜ」といふので、河内山は形を改め調子も時代に「櫻井氏にはお役目御苦勞」と直侍の變名を呼ぶと、直次郎「も御使僧にはまつ」と右手を出し座つて向ふへ招ずるので、河内山が「お、」と受けると、三曲尺八入りの合方になり、悠々といはる。

あとに残つてお辭儀をしてゐた直侍は軽く立上つて行きかけ心ついて、袴の鬘をボンと叩いて反身で突袖をしてゆるりといはるといふ順序で、無論、後者の方が派手で芝居らしい行き方である。

吉右衛門も以前菊五郎の直侍でこの引込を見せたことがあつたが、近年は多く直侍を出さない方である。

鴈治郎の昨今

—てに京東—

日比繁治郎

△五月の中座を打上げて以來、六月は東京行き、七、八、九が休み十月は益替りの吉例でモウ顔を見せるかと思つてゐると、遽かにフイと東京行き、鴈治郎はかうして、すっかり大阪の見物に背いてしまひ、十一月にはモウ歸阪して来るものと思つてゐると、これが又引續いて東京滞在で、とう／＼いろいろの世評が湧き立つことになつてしまつた

大阪を見捨て、今後主力を東京に撥ぐ—といふのも一つ—其證據には東京で永住の家まで建て、子供

の小學校も東京へ轉校させた—。松竹の興行策では、隔月に東京と大阪へ出演せしめることにあるらしい—などといふのもあり、又—このごろの東京の見物は非常に鴈治郎の藝を珍重するので、本人もモウ大阪へ歸るのが嫌になつたらしい。—以上やうに臆測されて、異常の成行に、多數負負連の間に波紋を描いてゐるらしい。

⊗ 事實、全く、従來に例の無いことで、鴈治郎ばかりでなく、我童、福助、壽三郎などの中堅級までが東漸してしまつて大阪劇團は全く城明渡しの觀を呈してゐるのである。もと／＼一鴈治郎の存在が東にあらうが西にあらうが、國家の安危に關するわけでもないから、さう騒ぐにも當るまい、と云へばそれまでのことではあるが、藝術界の偏重が、如何に時代の所以とは云へ、かうも露骨に現はれるものかと思ふと、そこに多少の關心を有たすにはゐられない事になる。もと／＼

鴈治郎の藝境は文樂座の人形淨瑠璃と共に大阪特有の香氣の高い郷土色を有つた藝術であつて、さう軽々しく異郷へ移さる可きものではない筈である。大阪の土地があり、大阪の人があり、そこに大阪の鴈治郎があるわけで、大阪の土地を離れて鴈治郎の生命はない筈である、とかう思はれてゐる鴈治郎である。一旦の出來心でこれがむざ／＼と東京へ移され可き筈がない。カフェエやバーの東京進出大阪すしの銀座輸出、曰く何々、と兎角このごろは東京人の間に大阪情調とか、何んとか上方趣味が喜ばれてゐるやうであるが、そんな意味で鴈治郎が東京劇界へ迎へられてゐるやうならば、それはあまりに淺ましい。

⊗ 又モウ少し眼界を廣めて、目下の日本の文化的進出から見れば、上方趣味だとか江戸情調だとか、そんな狭つくるしい考へが間違つてゐるので、飛行機なら二時間半、燕號で八時間二十分を費せば東

京と大阪の交通が出来るのだから、最早東も西も大阪、共に大都會の一部と一部だ。鷹治郎が大阪で打つてゐるやうが東京へ出勤してゐるやうが、それは同じことでお互ひの都會人の趣味だつて、さう／＼いつまでも双方に偏重してゐる筈がない東京情調はやがて大阪の趣味で、上方趣味は東京人の共に享樂すべき筈のものとさういふ風に云へないこともない、又事實上に於ても次第にさうした交流色が現はれて來つゝある現状でもある。だから大阪の鷹治郎、上方の鷹治郎と云つて我物顔をしてゐる大阪人が間違つてゐるのかも知れない、等しく大藝術家ならば、廣く日本の鷹治郎と云つても然る可きわけである。

話が飛んだ理窟ほいことになつてしまつたが、所詮は一般人の日常生活なり趣味が、時代の波調につれて、同一所に停滞してゐることを許さない目下の状態では、芝居だつてさう／＼いつまでも同じ

調子のテンポで興行をつゞけてゐるわけにも行かない。何んとか打開の道をつけろ、とかういふ松竹興業の方策で、東西交流を激しくする一方法の現はれに他ならないので、鷹治郎が決して大阪を見捨てたわけでもなければ、永住の家を建てたなども嘘の皮である。子供は學課を廢するわけには行かぬから滞在中は、特待生として、築地の文海小學校へ預つて貰つてゐるまで、一家はやはり細川旅館に宿泊してゐる。慣例興行が時に變化されることはあつても、さう／＼いつまでも鷹治郎だつて東京でばかり打てる筈がない。十二月にはこれは京都の年に一度の年中行事顔見世があるからに歸る。さうして、いよく昭和七年の劈頭興行が中座で開けられる筈で、これは今から秘策を凝らして、萬全の興行を遣る筈だから、久しぶりだ鷹治郎熱が勃興するだらう。

さて、鷹治郎の昨今の状況は、どうか

といふと、十月興行では開幕劇に、東西兩成駒の顔合せとして「樓門五三桐」歌右衛門の五右衛門に久吉で、双方繪畫美の極致をあらはし、貫目と貫目の大舞臺いつまでも目にのこる、云はゞ話の種になる一幕。これが濟んで、いよく役揃

(四十五頁より)

タンク



ガツチリした感じ
じは鋼鐵張りだ、
と云つて裝甲列車
程のスピードでな

い。まあタンクと云つた方が適切だらう
又の名を「チヨンさん」といふ。これは重
に藝者衆に呼ばれる異名である、何でも
遊んでゐる時、輿が乗ると面白い唄を唄
ひ出す。チヨンコ節とかいふのださうだ
それが中田正造君のプロファイルだ。ドツ
シリと重みのある人にしてこの仇名はち
よつと異様な感じがある。こゝらで仇名
集もチヨンにしよう。(終)

ひの栗山大膳である。近來ますます健康の域にある鷹治郎は、堂々たる大舞臺を見せつけて満場を唸らした。至八場四時間をぶつ通して出づ張りの意氣まことに壯くなりといふべしで、七十二歳の老人がこれで息切れ一つしないといふのだから素晴らしいわけで、羽左衛門の主水に對する時、宗十郎の忠之に對する時、或ひは又歌右衛門の將軍家光に對する時、誰れが鷹治郎を七十二歳の老人と見るものがあらう、殆んど不可思議の境地にある彼鷹治郎の體軀はますます健全色を帯びてくる。——すこしは年老りに見せんと貫目が無いと思ふて、それに苦心します。——こんな異様なことを云つて東京の批評家を煙に捲いてゐた。

鷹治郎の忠實細心は、いまに始まつたわけではなく、大阪でも東京でも、相變らず、初日から千秋樂まで、すこしの休みもなく持役の研究をすることにゐる。夜となく晝となく考へた上で部分々々の

演出を工夫を考へる。勿論それは第三者から見て時には改態になることも往々ある、けれども、鷹治郎はそれを廢さない箱登羅、成笑、成三郎、扇などが同行して來てゐるが、毎日のやうに——この邊は今日はいふことによつて見よ——明日からかういふ工合に云ふことにせよ——と殆んど毎日のやうに命令を受ける。永年の習慣で弟子達はモウ慣れ切つてはゐるもの、それでも、時には——モウ、え、加減にしといたらよさうなもんやないか——と内々愚痴をこぼしてゐるとも御存じなして、又翌日になると、明日からかう云ふて見よ——と相變らず命令が下るさうして、その命令通りに行つた、自分の藝も心持よく進行すると、非常に愉快らしくニコくとして、舞臺から駈歩で樂屋へ歸つて來る。鷹治郎には東京も大阪も無い、たゞ舞臺があるばかりである自分の工夫を凝らすべき舞臺さへあるならば、それは日本であらうと外國であらうと、何處の國でも、そんなことは眼中

にはない。歌舞伎座では中車老が常用にしてゐる樂屋を臨時借用で納まつてゐる。その樂屋の裝飾に、明治初年頃の古番附を貼り交ぜにした二枚折立てかけてある。鷹治郎何心なく、これを見てゐると、その中には、父靨雀の名も見えるし、中には虫眼鏡で見ればわからぬほどの細字で、己れの名の幼名實川鷹治郎の名さへ見出される。形容詞を使へば、鷹治郎暫らく感慨に堪えざるもの、如く、實は何等の感慨にも値ひせざる如く——それは俺の十七の年齢やさかい何年前やな、え、五十五年か、ハ、ハ、ハ、——と鷹治郎一流の大聲で笑つておしまひ。鷹治郎には過去も無い、未來もない、たゞ現在日々の舞臺があるばかりである、今日の舞臺を如何に活かす可きかと彼れの全生命であつて、同時に日常生活なのだから、東京であらうと大阪であらうと、土地によつて變化を起す可き謂はれば毫頭ないのが當然である。

さし美さは麗のこ

ソビブラク



白色肌色 正價三十錢

新發賣の
布袋入

ソビブラク 洗イテカ粉



鴈治郎を思慕す

— 劇壇の趨勢に鑑みて —

富田泰彦

「道頓堀」の編輯者から私に提示された題は「東京出演の鴈治郎を不見記」と云ふのである。豈夫不見轉評を書けと云ふ謎でもあるまいが——是れは相場の豫想ほどには、危かしい妄斷を下さなくても、大凡の見當だけはつくと思ふ。

歌舞伎國の衰兆の何のと、世間の一部では驕ぎ立て、ゐるがさうした議論は、敢て事あたらしくないほどに、由來その實現性は頗る薄弱なものだ。——たとへ資本主義が崩壊するやうな運命が、めぐり來ようとも、常に眞善美を欣求して止まない吾人の藝術觀には猶ブルジョア世界への渴仰と、超世間的な英雄崇拜の念とは、大衆のにも、底流となつて支配し感奮せしめてゐることに、想到せば妙しも憂ゆべき筋はない。この意味に於て「私達の鴈治郎」の存在は、何れだけ歌

舞伎の頹勢を支持しつゝあるかを知るべきである。

その鴈治郎は、芝居シーズンの「道頓堀の秋」に背きて東都劇壇に居据つてゐることは、我々好劇家にとつては、云ひ知れぬ物淋しさを痛切に感ぜしめつゝあるかを——

だが、併し今の鴈治郎の存在は、ひとり大阪劇壇のみの獨占に依つて價值づけるものではない。彼は天下の名優としての使命は、聲價は、努力は——更に端的に云つて終へば、百年の後のラスト・モーメント（終焉の地）も、單なる一大阪の小天地にのみ求むべきではない。

鴈治郎の不滅の精力は、西に東に不斷の春を、吾が歌舞伎

の世界に齎らすものである。いつぞやも云つたが、太陽の輝きは廣大無邊である如く、偉人に於ては聖書にも云へる如く「常に賢ならず」たゞその機に觸れ、その境を距て、——「恰も「東京出演の鷹治郎を不見記」の場合に於てこそ泌々と知ることが出来る所以でもある。

こゝに若し郷土的な熱愛を以つて、鷹治郎を今更ながらに思慕するの大阪人ならば、それは好劇家と否とには拘らず。この不世出の名優の存在を、謳歌讃仰し、彼の最後を飾るの——今後幾年かを、更に光輝ある藝術生活者として保護すべき責務があらうと思ふ。

扱て「東京出演の鷹治郎を不見記」——十月、十一月を歌舞伎座の一枚看板と納まる。それは鷹治郎自身に取つては得策であつたか、何うかは幕内を覗くまでもない。私自身にしてからが異議もある。だが、こゝでは舞臺の上の不見轉評、聲稜敷の一隅にゐる氣で、それらに向つてあげづら、相手が無い。況して智謀すぐれた松竹の幹部さんから、不振の歌舞伎國に活を入れる氣の獨參湯天下一品の由良之助役者も「栗山大膳」の後では、少々二番煎じほどの効能やと——大方是れも百も承知で今度はグツト若返らした若狭之助で見せる

「忠臣藏だ」と腕んだが僻目か。若し間違つた處で。嘗ては本役たりし成駒家の若狭、例の霸氣満々の舞臺が目にちらつくと共に、何處やらにももう一人若狭がるさうと思へば、番附に鹽谷判官——市村羽左衛門——

日頃頭腦がよくないとか、悪口づかれてゐる幸四郎の師直だけに、大序では何方へ冠を曲けて可いかは、實際にお察しする。——それほどに喧嘩早い鹽谷殿、鷹治郎も、ひよつとすると樂屋内の八方美人が、舞臺にまで出ては滅茶々々と氣使ふ位爾餘は危なげのない藝は——たゞ時には、ムカ腹の出る日もあり時々の伴内に廻つた箱登羅への當り、尤もこの當りだけは如何な箱登羅老も、神かけて願ひ下けのことだと思ふ。

斯くて羽左の判官對、鷹治郎の若狭之助、由良之助の接觸其處がソレ「鮎だく」の水魚の交りなくとも、水に油だけは舞臺の禁物、尤も前興行の「紅葉の間」の暗試合とは違ひ相手も肩もかしはせまいが、成程五行本にもある通り「浅き匠の淺野殿……」などと感づいて見ても、今は四段目の駈けつけそのまゝ、「遅い」と云ふのがこの「不見記」の水つほい落なのである。

X
これよりも、後の「炬燵」で、ゆつくりと京顔見世の土産の勘考、役者は誰、狂言は何——久々の關西の土、たとへ時雨る、とも、春心地の情景備はる劇場の内外、彼の晴れやかな明る、雁治郎の顔を、一日千秋の思ひで待つものは、強ち私一人のみではない。

X
何にしても雁治郎一人が動いて呉れば、東西劇壇とも、異色は漲らない。この意味に於て、雁治郎の東京移住説も、大きく劇界全體の問題としては、慶賀したい。幾度も云へる如く雁治郎ほどの名優は、眇たる郷土觀念のみで、是非すべきものではない。

X
雁治郎が東京に出演したればこそ、猿之助の奮闘劇も、今現に中座に於ける吉右衛門の十八番揃廉賣興行も示現された譯だと思ふ。敢て通を振り廻はせば、雁治郎東京役者たりせば、多年懸案の左團次の道頓堀出演も不可能でなく、更に菊吉合同劇の夢（上方の好劇家として）も、満東京阪何れかの劇場に、實現出来ないとな誰が反對する論據があらうか。況してや歌舞伎國難の時、斯かる興行的「權益」は松竹としても此際是非確保して置くべきだらうと思ふ。

X
況んや近來ブル藝術かの如く思惟されて、歌舞伎も眞實市場的範圍の狹められて來た今日此頃、この興行機構の上にも困襲の殻を脱ぎ捨て、俳優自身も勞資協調の精神を以つてこの國難を打開すべきではなからうか。

X
社會百般の事業に、清算時代が來てゐる如くに、歌舞伎そのものにも清算が必要とされてゐる。それを氣附かぬに於ては千載にその悔ひを貽す結果を招くことは火を賭るよりも明白である。沈滯は腐朽への道程である。先づ歌舞伎國は——手近の例として、大阪劇壇だけでも、以上列記した宿題だけでも此際是非解決を與へて貰ひたいものである。

X
さうして、第一に實現可能性ありと、岡目でも見られる、雁治郎と吉右衛門との顔合せである。

X
私は何れにも怪我がなくてさうして興趣ある狂言として「寺子屋」を第一に擧げたい。
源藏役者の雁を松王に迎へての吉右の源藏の緊張味——歌舞伎の生命は、否、興行價值に於て、未だく斯うしたアン・トメント（取合せ？）に依つて持續されることには、斷定を下して可い。

× 斯くて一般好劇家も、この恵まれた年代に於て、所謂傳統藝術としての吾々祖先から繼承した世界無比の歌舞伎を、一日たりとも、永く持久力ある存在性を確保して置くことは、大和民族の當然うべき義務ではなかつたであらうか。映畫やレビエウの流行しなかつた昔——民衆の手に依つて發展し來つた我國劇を一朝一夕に……それは時代の推移とか嗜好の變遷とかの遁辭を挾まず……に繁履のソレの如くに捨て、終ひ得る性質のものであらうか。

× 世界は擧げて日一日と、民族的に尖鋭化して行く中に、ひとり歌舞伎のみが持つ長閑なエモーション、瑰麗な構想からなる幻影に陶醉し得ることの歡びを感じないほどの不幸は、他にあらうか、鴈治郎の舞臺を見ざる日の大阪人の寂寞の心は、直ちにその根幹から打ち倒さるゝが如き、歌舞伎に對する愚昧な「自滅の斧」を振り翳す者が……若しありとすればそれは諸君は座して瞑するの不甲斐なさに面罵さるゝに等しいものであると思ふ。

— 刀折れ矢盡くるまでの奮闘こそ望む。而してソレに支援を與ふべきは大衆の力である。

×

◆ ◆ ◆



金扇味淋

社會式株造酒津攝

◆ ◆ ◆

今や興行者も、俳優も、観客も協力一致して、この大きな「寂寞の影」を、吾等の歌舞伎國から速かに一掃すべき秋である——と我れながら下手な大見得を切つて柀を入れる。

(六、一一、二)

人形淨瑠璃史に於ける

近松半二の功蹟

倉田啓明

竹本義太夫を父とし、近松門左衛門を母として創生された、當流人形淨瑠璃が、貞享二年二月大阪道頓堀立慶町に櫓をあけて以來、更に元祿十五年、同じ所の東側に豊竹若太夫が豊竹座を獨立建設して、東西二つの櫓相對峙して、聲曲に人形に火の出るやうな競争をしたが、その竹本座も貞享から元祿期までは開拓時代であつて、經濟的の興行成績から言つても、決して惠まれない謂はゞ受難時代であつた。このことは大宗師集林子の如きでさへ、年五十兩の僅少な給料で甘んじてゐた點でも、凡

その想像がつくだらう。それといふのも義太夫によつて創造された、新しい音樂藝術も、前代の宇治加賀掾や井上播磨掾の淨瑠璃が、まだまだ大衆の好尚に深く浸透して、義太夫の曲節すらその影響を全く脱し得なかつたのだが、彼の遺志によつて後繼者となつた若き天才兒竹本政太夫に至つて、天性の低聲ながらも巧緻な節廻しをもつて、義理人情の機微を繊細に描出し、

大近松もまたこの不世出の天才のために、人間生活の秘奥を探求した、幾多の人生悲劇、慾愛の葛藤を曲盡した傑作をものして、彼の藝術を如實に生動せしめたおかげで、やうやくにしてこの義太夫節なる當流淨瑠璃が、一個獨立した新しい藝術として完成されたのであつた。

従つて作者としても大近松の直後に、竹本座の經營者兼ねた竹田出雲のごとき偉才があらはれて、多くの不朽の作品を發表し、一方豊竹座の方でも紀海音をはじめ、並木宗輔、若竹笛躬、西澤一鳳等が、それぞれ佳作を世に問ひ、また人形に於いても辰松八郎兵衛はいふまでもなく、吉田三郎兵衛同じく文三郎のやうな名人が輩出し、人形師には篠尾八兵衛等の名工があつて、努力精進した甲斐あつて、わが國特異の人形淨瑠璃は實永正徳を経て、享保から寶曆に至つて、はじめてその全盛時代を現出した。然しこの全盛期も明和に及ぶともう衰頽の影を宿

して、かへつて人形淨瑠璃の傑作を、自家藥籠中のものにした歌舞伎が、隆昌に向ふ機運を將來したのである。

明年百五十忌に相當する近松半二の歿したのは、天明三年二月五十九歳を一期としたのだが、彼は儒家總積以貫の子に生れ竹豊二座の全盛期に竹本座の作者として、多くの名篇に腕を揮つたので、その作品の文學的價值から考へても、巢林子や出雲に次いで高く評價さるべき作者であらうとおもふ。この十一月に文樂座ではその百五十年記念として、彼の代表作の一つの「伊賀越道中双六」を通し狂言として上演し、追善興行を行ふさうだが、この機會に一應近松半二のわが人形淨瑠璃史上における功績を、考察しておくの意義あり、且つ興味あることだらうと信ずる。

元來、義大夫を父とし、巢林子を母として生れた人形淨瑠璃の當初は、淨瑠璃が主で人形が従の位置にあつた。その頃は竹本座の人形芝居以外に、南京あやつり、竹田のぞきからくり、獨狂言、樽人影、笠人形、碁盤人形、七變化、雨蛙、おでこぜんまい、彌三五郎など、いろいろの人形芝居が存在した。そして竹豊二つの櫓の人形淨瑠璃は、それ等の人形芝居と異つて最初は眼に訴ふる藝術にあらずして、主として耳に聞く藝術であつた。大近松が義大夫のために執筆した。數多の初期の作品も何處までも聲曲として苦心を凝らしたものであつたが、然るに時代の好尚は漸次移動して「耳」の藝術よりも「眼」の藝術

即ち人形芝居の舞臺に興味をつなぐやうになつて、従つて淨瑠璃に於ては、より複雑な變化に富む内容を要求され、舞臺においては、舞臺面の變化や人形の巧妙な動作表情に對して、喝采を送る傾向が甚しくなつて來た。畢竟人心の趨向が單純から複雑へ移り行つたのも、まればまた已むを得ない時代の歩みである更に政大夫の纏細にして巧緻極まる藝術が、これを多分に示唆したものと云へるだらう。それ故、淨瑠璃作品の内容に次第に著しい技巧が重んぜられるとともに、一方では舞臺の人形の細工に巧妙な工夫が凝らされ、或は人形つかひでも、竹田出雲が座元になつた時興行した。大近松の「用明天皇職人鑑」では、辰松八郎兵衛が手摺をはなれて、長上下をつけて出づかひをしたり、その後「蘆屋道満大内鑑」享保十九年)では、三人つかひの濫觴を見たり、人形細工師と人形つかひとの相關的新しい努力は、益々眼に訴ふる舞臺藝術に大衆の興味が集注されて來たのである。

この傾向は淨瑠璃作者に、果して何事を要求したであらうか言ふまでもなくそこには、音樂的要素——即ち井上播磨掾が得意にした景事や道行によつて代表される——以上に、演劇的要素が要望されて來たのである。大近松も政大夫のために筆を執つた晩年の作品には、この要求を多分に容れてゐるのでもわかることである。しかもその後年を経るにつれて、この演劇的要素が出雲、文耕堂、松洛等の作者によつて、更に深く擴充され

殊に出雲の如きは演劇的技画家として、頗る傑出した作者である。後年歌舞伎劇が人形浄瑠璃のお株を奪つて、盛んにその傑作を舞臺に移植したが、それ等の作品の多くは、大宗師巢林子の作よりも、出雲等の作が殆ど大半を占めてゐる点から考へても、文學的價值に富んだ巢林子の作品よりも、それに多少の遜色あつても演劇的價值に恵まれた作品が悦ばれたことが明かであらう。そして近松半二はこの演劇的要素に優れた技画家として、堂々たる歩みをもつて竹本座に登場した人であつた。

前にも述べたやうに、半二は人形浄瑠璃の全盛期に、作者として活躍したのだが、その全盛期は決して彼一人の力で生れたものではなかつたにせよ、彼の努力があつたことを將來した點は、何人といへども否定出来なからう。しかも彼が努力し精進したのは、人形浄瑠璃の演劇的技巧であつた。今假りに半二の傑作「妹香山婦女庭訓」及「伊賀越道中双六」の二篇をとつて考へても見るがい。就中、後者のごときは殆ど音樂的要素が空乏し、文藻また前者よりもはるかに劣る作でありながら、徹頭徹尾演劇的技巧によつて一貫されてゐるではないか。前者の「妹香山」には音樂的要素もあり、詞藻また大近松、出雲の傑作にも劣らぬ光彩陸離たるものがあるが、舞臺上の技巧になると、この大先達を遙かに凌駕した、たとへば妹香山の中を流れる吉野川——即ち山の段のやうな雄大にして、しかも微妙な優れた技巧を見ることが出来る。

かく考へると、半二は尠くとも竹田出雲とともに、わが人形浄瑠璃を全盛期に導いた、有力な功勞者であると同時に、後代の歌舞伎劇に絶大な貢獻をした、演劇史上の恩人でもあると言へる。ましてわが本格的な歌舞伎は、出雲、半二の作品を中心として發達した観があるのを知ると、單にこの兩者の功績は人形浄瑠璃作者としての寄與以上、日本演劇史上に特筆大書すべき人物である。然るに世人、わが國の人形浄瑠璃を語れば、竹本義太夫と近松門左衛門の偉大を説き、殊に文豪としての近松を禮讃するがもとよりその偉大は今更いふまでもないけれども單に文學的價值のみに重點を置いて評價することは、浄瑠璃作者としての近松の全豹を知る所以でない。今日の義太夫節——植村文樂軒以降の人形浄瑠璃は、義太夫や近松の衣鉢を傳へ、それを祖述するものでなく、出雲や半二や、文耕堂や、更にかへつて東風の豊竹座の若太夫の流派と作者紀海音等に負ふ所甚だ大なるものがあることから考へて、世の浄瑠璃研究家は一應これ等の人々の業績について、再検討する必要があると私はかねてから確信してゐる。机の上での文學的研究もさることながら、由來浄瑠璃は耳に訴へ、兼ねて人形の動作によつて眼に訴ふる藝術であるから、文字ばかりの研究では決して意味をなさない。そして曲節の研究を主にしてこそ、その眞價が會得されるのである。茲に半二の紀念興行に際して、いささか卓見を述べて彼の功績の一面を窺ふ所以である。

戯曲専門

新 興 戯 曲

月刊 雜誌

優秀なる上演戯曲の發表と新人の紹介！

△本誌の再現は劇界に旋風を捲き起してゐる。當然の結果であると言へよう。
 △戯曲の最高水準に立つてたゞよき戯曲を世に送るのが目的である。
 △戯曲時代来る！その機運招致の主體となるこそ本誌の目標である。
 この充實せる内容にこの廉價名實共に本邦唯一最高の戯曲雜誌

十一月號發賣

戰國時代史(二幕)

大隈俊雄

赤とんぼ(一幕).....
 光明もある俄鬼道(一幕).....
 東京と理髮師(承前).....

香村英一
 今住利雄
 八住利雄

河東の獅子(喜劇)

池田大伍

斷崖(一幕).....
 袴(一幕).....
 食慾に就いて(一幕).....

一木蕃子
 岡本龍雄
 舟橋涉

親父教育(三幕)

ウエ・カタ・エフ

汎く一般讀者の投稿戯曲中から優秀なるものは續々誌上に發表する

△九ボ二ダン組百六十頁内外で一部二十五錢、半年二圓、一ケ年三圓八十錢

△半年以上の直接申込者を誌友として種々の點で最大限度の優待をする

△十一月下旬東京に於いて第二回誌友大會新興戯曲の會を開催する

誌友大募集！即刻申込まれよ！優待する！

定價 一部三十五錢
 (郵 稅 四 錢)

東京市赤坂區氷川町四二

新 興 戯 曲 社

振替 東京 三七二八六番



武智光秀 吉右衛門

吉右衛門三役

遠藤爲春

吉右衛門の中座出演は去年の九月以來である。今回の演物は馬盃の光秀、逆船、河内山といふことに取極つたのであるが、馬盃と河内山は、大阪では初演である。中幕の逆船は大正十三年に上演したことがある、何れも吉右衛門の演物中屈指の傑作のみを選抜した次第である。

さて一番目の馬盃は、人も知る如く、海老蔵、幸四郎に出發して、團十郎、菊五郎、團藏が得意とした時代のものである、團十郎、菊五郎、團藏とも、其演出は大同小異であつたが、晩年團十郎は饗應の場、即ち肩間割を上演しなかつた。小生が見初めてからは一度も演じてゐない。今回吉右衛門が上演してゐる通りである。團十郎最後の上演は、東京の歌舞伎座で、春永は菊五郎、皇月は秀調、蘭丸が家橘（羽左衛門）等で團十郎の光

秀は一々擧げていふまでもない名品であつたがとりわけ本能寺で、花道の鳥の塀を焼かれし心地あたりの抑暢は誠に無類で、切髪を見て春永との氣味合の見得、菊五郎と相俟つて實に双絶箱を抱へての引込まで其妙全幕を通じて今に記憶を去らないものである。愛宕になつて、茲は處も愛宕山のせりふから、水社杯になり、日吉丸内見の邊り風堂に場つの概で、三寶割の大見得、幕切の笑ひまで、頗る大芝居として好劇家を堪能させたものである、扮装は吉右衛門の通り本能寺が紫紺の上下、着附、鬘は並平の茶釜である。愛宕は、吉右衛門は織物の上下、着附、後が水上下であるが、團十郎は前の着附上下で水上下になるの、これは歸りの述懐があつたからである。それと水社杯の袴を高股立をとつてゐたことが違つてゐる。

紫紺の色が非常にやかましくいろ／＼の色本を見ても氣に入らず、折筋、大彦といふ吳服屋の纏道具の幌幕の色が氣に入つてそれを見本にしていせうを染めたといふ逸話がある。團藏も矢張り柄は團十郎通りであるが菊五郎は、全然違つて、黒の着附上下であつた、髪も並平の生締であつた。これ等は、海老藏と幸四郎の系統から來る相違なのである。團藏は此光秀については中々の白眉があつたらしく、菊五郎上演のときもいつも他座に出



樋口次郎兼光 吉右衛門 團十郎

ては中々、おつたらしく、菊五郎上演のときもいつも他座に出、市村座で上演したのが最初で、得意の名調子を活用して頗る好評を博し、故田村成義翁が生前、吉右衛門を見せるにはこれが一番だともて激賞した傑作なのである。演出は三名優の長をとつたもので吉右衛門一流の演出である。

次の逆鱗は事實吉右衛門の長所を充分に發揮し得るもの、當代右に出るものゝない絶品であることは道頓堀上演数年後の今

日再びこの一幕に絶大の期待をもつて迎へられてゐることでも證據立てられる次第である。且今回は、友右衛門の權四郎、三津五郎の重忠、時藏の小よしの外に、魁車のお筆といふ好配役あるに於ておやである。敢て茲に贅言を費す必要はないのである。

それから河内山、これも又多くいふ必要はない。光秀に、松右衛門、河内山、吉右衛門を見るべき絶好の三役であるといふにとどめる。

この支關の表向き、おれに騙りと名を附けて、若年寄りへ差出すか、但しやア騙りを押し隠しお使僧で無難に歸すか、二つに一つの返答を、聞かねえ内は宗俊も、只この儘にやア歸えられねえ(大勝)引かれ者の小唄とやら、出る儘のその雑言、いかにもわれが望み通り、騙りと知れた上からは、縛り上げて首打ち落し、松江の手並を見せ呉れん(宗俊)オットさうはなるまいぜ。たとへ騙りの罪あるとも、若年寄の支配をうけ、お城を勤めるお數寄屋坊主、河内山は御直參だぜ。高が國主の大名風情に、裁許を受けるいはれはねえ。それとも自由にこの首が落されるなら落して見る。

「河内山」(一)「せりふ」

中村 吉右衛門

× × × × 青年歌舞伎の思ひ出 × × × ×

成駒屋

兄弟の舞臺

西尾福三郎



今からざつと十年前、京都に青年歌舞伎と稱する華やかな一座があつた。

一座の顔ぶれは扇雀を盟首として、秀郎を後見格に、殆んど當時に於ける全關西歌舞伎界の花の若武者を網羅したかの觀があつた。一寸氣億に残つてゐる所を數へてみても、狂藏、延太郎、龜松、卯之助、莚藏、多賀雄、かなめ、喜久太郎、福太郎、小福等がある。

以上の諸優は今でこそ勝手々々に離散してゐる人もあるが、それぞれ次の時代を形造る點に於ては忘れてならない存在價值をもつてゐる人達である。

こうした一團の人達が明治座、京都座を藝道場として、珍狂言新狂言の數々をみつちり勉強しておいては、他の關西各都市を巡業して廻つてゐたものだつた。兒雷也、小栗判官、肥後の駒下駄等と云つた古味なものを見せてくれたりさうかと思ふと一方では、坪井正直、額田六福、南江二郎と云つた當時の新進作家のものを片つ端から躊躇なく舞臺に上せてゐた。

彼等の藝の巧拙はともかくとして、その眞摯な研究心と潑刺たる意氣込みにはいかにも青年らしい感激が漲つてゐて、あの京の年中行事として一度も當りを外した事のない顔見世とさへ

樂屋話

新聲劇
その三

X Y Z

舌足らず



舌の長いのは廻り過ぎてよく喋舌るその女が

よく喋舌るといふ奴はどうも始末に困る、いくらいゝ女だつて品がない。だが、吾が娘女優福岡君子君は、その舌が短いのである。だから舌足らずといふのである。この舌の短いといふことは甚だ色氣がある。甘たれつた調子になるからである。だから彼女は色つぽく、突ツ轉はしの娘形をよくやるのである。

困つた子

人氣を争つて負けなかつた程だつた。

この人氣の大部分は、何と云つても一座の花形中村扇雀が聲望の然らしめる所であつた。當時に於ける扇雀の藝は、單なる衆愚の盲讚だけではない、實際感服すべき傑作の數々を残してゐた。現在では歌舞伎劇を土足で蹂躪して快としてゐる菊池寛氏でさへ、當時は熱心なる扇雀の讚美者として、彼氏の扇雀を推稱した一文が大毎の京滋附録に麗々と記載された程だつたから、それで大體の想像はつかうと云ふものがある。

まことに天才扇雀こそ當時に於ける尤も耀ける存在だつた。中ほんと云ふ後援雜誌が出たのもその前後であり、扇雀が林春虎と云ふ雅號で大阪の文學青年に擔ぎ上げられて夕霧と題する同人雜誌を出さうとしたのもその頃だつた。

今から考へてみて、扇雀の人氣が尤も沸騰してゐたのはその前後の時代であつたらう。今だつて決して沈滞してゐる譯ではないが、何うも過去が餘りに華やか過ぎただけに、現在の地味さが餘計目につくのである。地味と云ふ言葉に誤弊があるとして、上二りな華やかさから、そ

れは一見地味な堅實性を帯びてきた證據であるのかも知れないが……それはとにかくとして本誌八月號の高安氏の言葉こそ扇雀のために眞の知己的忠言であると思ふ。

私も最近京都で扇雀の充分な活躍振りを見たが、その内で肝要の盛綱が乃父鴈治郎の十六ミリの存在としてより外に特に扇雀のものとして考察する餘地のない事に失望を感じた。それと共に、却つて外の役に扇雀の存在を強く意識した次第である。

名門の出と云ふ有利な立場とわ倭驅難聲と云ふハンデいを全然別にして、猶且つ中村扇雀の存在は獨特の價値を持つてゐる。その他扇雀の事に關しては、前記八月號誌上の高安氏の一文が理を盡してゐるから、今更ら私が蛇足を加へる必要はないと思ふ。

扇雀と共に、當然考へられなければならない存在に兄の長三郎がある。

長三郎と云へば、誰しも踊りの世界だけに局限して考へる事を當然のやうに心得てゐる。成程右團治、長三郎より外に、これと云ふ踊り



小松孝子
君、元オ
ペラのコ
ーラスか
ら叩きあ

げた強か者の如御である。樂天地に國精劇が組織された當時から今日迄、ずるぶん長い間苦勞をして來てゐる。今では一せき切つての新劇女優だが、そのピー／＼の頃は困つたわ、困つたわとよく困つてゐたさうである。何に困つてゐたかは問題でない、困つた子は小松孝子に首が通じることから誰いふとなくさう呼んでゐるのであらう。だが、今は其仇名をいふものもない。

ノンキナトウサン



河内の文
化村で倉
橋仙太郎
が第二新
國劇を興

手の無い關西では、その相棒の右團治が休演してゐる。今日、踊りと云へば何としても長三郎より外に人が無い事になつてくる。

しかし、幸四郎、三津五郎、猿之助、菊五郎等が相踵いで來演するやうになつては、仲々長三郎一人安閑としては居られない。彼等は何れも長三郎の先輩名手だから、就いて修業するには絶好の機会だが、今後は、單に踊り一本だけで、役者としての生命を持ち續けて行けるか何うかと云ふ事は、大いに考へなければならぬ問題である。この點に思ひ到るならば、乃父百年の後、林長三郎の存在は果して如何なる位置を占めるであらうか。これは誰しも相當興味をもつて考へてみたい題目である。

過去の新劇團簇出時代に、長三郎も五色座を組織して、新作劇と新舞踊とに更つた方向を開拓しやうと試みた事があつた。が、それも思はずしい成績を見ずに消え去つて以來「蜂」と題する新舞踊にやゝ新しい氣を吐いたのみで、殆んど彼の存在は舊來の持ち役以外に一步も出なかつた。

弟扇雀に較べて、餘りに平凡な存在であつた。

たが爲、世間から問題にされる事が尠かつた。一にも踊り、二にも踊りで、それ以外には輕い突つ轉ばし位で當てゝゐるので問題にされなかつたのは損である。

しかるに、私は十月の京都座で長三郎を座頭とする若手の芝居を見るに及んで、特に長三郎に就いて見直すべきものがあるやうに考へられなければならないのである。

定助權八の二役と曾根崎の徳兵衛とに於て、長三郎は何れも出色の出来を見せてゐた。中でも權八型は從來から彼の柄に嵌つてゐる所だから當然の出来であるとなせなければならぬが、愚直な定助の出来榮えは案外見事なものであつた。徳兵衛の方も、葉林子のそれではなく、半二の描いた遊戯氣分の多い徳兵衛に於て特に長三郎らしき味を出してゐた。この定助と徳兵衛で成功した點を一口で説明しやうなら、それは大阪落語の持味である。

これを文章で云ふと、宇野浩二や直木三十五の矢張り大阪系文士の小説が持つてゐる味であり、落語でなら、九里丸、春團治、三木助等のイキではなからうか。

した時、男では大河内傳次郎、女優には或るプロフェツサのマダムが参加した。それから幾年か経過してそのマダムは遂に今日の金剛麗子君になつた。プロフェツサとも別れて後に、パトロンとして現はれたのがノンキナトウサンそつくりの某、で、一時はその尊稱を奉つてゐたが、此頃はそのノンキナトウサンをキャンセルして獨身生活とは？

チヤボ



澤田の机に龍之助が櫻の花が美事に咲いてゐる舞臺で『斬つた〜、胸のすく程人を斬つた』とやると、後室姿の美しいお銀様が『龍さま』と出て来る。そのお銀様は澤井光代君だつた、その頃のこの人の舞臺には

彼者では當然延若一人が恣にしてゐる。上方物の滑稽狂言の世界である。それも延若のやうに粘重でなく聰明でもない愚直一天張りの平凡人——さう云つた世界に案外長三郎獨特の境地が展けるのではあるまいか。

愚直神の如き定助の舞臺を見てはたゞ笑つて許り濟まされない或る眞實味に打たれるし、當然悲劇であるべきお初徳兵衛の心中にも何だか涙の底に一脈笑ひの氣分を點綴してゐるのを忘れる事ができない。

笑ひと涙の適度に交り合つた芝居!! それこそ現在の觀衆が心から求め探してゐる所である——とするならば、この希望を満すに足る芝居を見せてくれた長三郎の前途に、私は改めて期待に充ちた讃辭を呈したく思ふのである。

長三郎扇雀一座の出現を観て、私は圖らずも一昔以前の青年歌舞伎華やかなりし頃を思ひ出した。そして毎日大當りの盛況であるときいて若しかしたらこの一座の中から半永久的な組織の下に新しい歌舞伎劇の氣運が生れるのではないかと想像してみた。さうなれば關西劇界は興味ある動向を見せるであらう。

文具

□高級事務用品

□生々堂謄寫版

□各種萬年筆

心齋橋筋の

黒田生々堂

電話船場(一三六番)
(四二八番)

妙に色氣があつたが、もうこの頃ではそのお銀様も見られない。身體の小さい所から名古屋チャボと云つてゐるが、本當に口の悪いのがよく附けた名である。

大御所



女優さん
の中での
オソリ
イ松竹女
優養成所

出身の腕達者である、そして新聲劇創立當時からの生へ抜き女優さんである。そこで彼のことを大御所といつて一座はみんな畏敬してゐる。稽古場の行儀の正しいこと、舞臺に熱心なことは道に大御所の貫祿を失はない。だから樂屋にゐても静かにお茶を立て、静かに飲んでゐる。大御所はやつぱり大御所である。アツ、名前を忘れた、それは富士野萬枝君。
(第二十九頁へ)

『投げ節彌之』と『彌太郎笠』について

子 母 澤 寛

「投げ節彌之」はいろ／＼な關係で、本當に私の書きたいものを書いてはるません、あれは本來は兄の彌吉の方が私としては重要な人物ではじめあの男の社會制度に對する反逆といふやうなところを狙つたのです。しかしそれに困る事情が出来て強いて勸王佐幕にこちつけ彌吉の思想に勸王志士といふ假面をかぶせて終つて、たゞ心ある讀者に私の意途を察してもらひたいと念じてゐたらそれが映畫になつたのを見ると、この勸王佐幕が豫期以上に大きく扱はれそしてまたその効果を得てゐるので、些か悲觀して終ひました。脚色者なり監督の方なりにも少し原作用に同情していただきたいと思ひました。一讀してもその勤王佐幕のちぐはぐしてゐるとこはわかられる筈だと思ひますから

それに作者は「彌之」が心中をした後ち彌吉が云々のところは最初無かつたのです。お花ですか、あの女がとほ／＼と奥州へ歸るといふところで終つてゐたのをこれまた都合であれだけ書き足しました。まるで息の合つてゐない事はきつと讀者にわかつていたゞける事と信じてゐました。そこへ行くと「彌太郎笠」はサンデー毎日で全く自由に思ふまゝに書かせて貰つたもので、これの非難はすべて私が負ふべきものです、片岡千恵藏氏がやがてこれをどんな風な映畫にしてくれるかと私は興味を持つて待つて居ります。さて二作を通じて芝居の上での問題ですが、新聲劇諸氏の「彌之」の方は機會が無くて私は觀てませんが、何事を申す資格もありません、たゞ原作が上述のやうない

「ギブス煉齒磨」

本品を使用すれば幼時より老年に至る迄歯牙を完全に保つ事が出来ます。
 何故なれば、ギブス煉齒磨は刷子がとどかぬ微細な間隙へ侵入して常に歯を美しく清潔に
 齒を保つ事は取りも直さず身體の健康を計るのでありますから毎日二回必ずギブス煉齒磨
 を御用ひ遊ばせ、さすれば氣分は爽快になられます。
 本品は美しきアルミニウム罐入りで桃色の固煉製であります。有名な百貨店、薬店及化
 粧品店に賣つて居ります。

大形 壹個 金七拾錢

大形中味 壹個 金六拾錢

小形 壹個 金四拾五錢

ロンドン パリス デイ・エンド・ダブリン
 日本代理店 株式会社

ギブス株式会社
 横山商店
 東區豊後町三番地

ろくろな事情に支配された上、原作者の私がいよく上演の廣
 告を見るまでこの上演を知らなかつたといふやうな譯で、従つ
 て芝居の上にも或る程度の不満を感じるであらう事を想像して
 ゐるだけです。「彌太郎笠」は、新年號の諸雜誌執筆に追はれ
 て非常に忙しい時でしたが、私自身で脚本にしたもので大阪は
 例によつてやかましい検閲制度のため私の書きたい彌太郎なり

市場の吉なりを出し得なかつた事は残念ですが、作者としては
 「彌之」よりはこの方が數倍可愛くもありまた自信もあるも
 のであります。「投げ節彌之」では、美しい彌之の問題を表面
 にして、その裏面には兄彌吉の熾烈な反逆性を書こうとしたも
 のであり「彌太郎笠」はたゞ渡世人の涙ぐましい義理を思ふ存
 分に扱つたものであります。(十一月三日 於大阪)

劇壇往來

東京大歌舞伎

中座十一月興行
一月 初日
每日午後三時開幕

【狂言】一番目「時今也桔梗旗上」二幕。新作大森痴雪作並舞臺監督吉川観方衣裳考案松田種次舞臺裝置與作重の井關の馬士唄一幕。中幕「ひらかな盛衰記」幕松右衛門内より逆松松まで、所作事上「二人唄々」長唄離子連中下「三社祭」清元梅吉社中。二番目「河内山」一幕。大切「教草吉原雀」長唄連中離子連中

【後劇】武智光秀、船頭松右衛門、實は樋口次郎兼光、使者北谷吞海實は河内山宗俊(吉右衛門)四王天但馬守、島山重忠、狸々悪玉、松江出雲守、雀賣好吉實は鳥の精(三津五郎)安田作兵衛、園生路、關の小女房およし、狸々善玉、腰元浪路(時藏)淺山多惣、本多彌三左衛門、北村大膳(吉之丞)奥女中毎、船頭富造、腰元春野(三津之)齋坊主、近習山野周助(元春三郎)宇野紹巴、馬士仙藏、近習大橋伊織(若猿)矢代條助、源五左衛門、船頭又六、近習黒崎要人(三吉)丹羽久四郎、間宮帶刀(梅笑)腰元若菜、老女岩崎(辰之丞)長尾彌太郎、文五左衛門、船頭九郎作(七三郎)腰元瀧川(茂々太郎)森蘭丸、腰元彌生(好太郎)鳥結梗酒賣(もしほ)馬士八藏、宮崎敷馬、鳥さし、飛六(九藏)小田春永、鷲崎左内、舅權四郎、高木小左衛門(友右衛門)妻操、乳人

重の井、雀賣おみの(秀調)夜番人松浦伴吾(力藏)日和上人講中六兵衛(和三郎)講中金八(紫若)近侍近藤辰之丞(魁童)自然生の三吉、遠見の繩口(廣太郎)丹波與作、こし元お筆、若侍櫻井新吾、實は片岡直次郎(魁車)

新國劇

二の替り
お名残り

浪花座

十一月一日ヨリ十二日マデ
毎日晝夜二回開幕

【狂言】第一林不忘原作小堀誠脚色「丹下左膳」四幕九場(新版大岡政談。第二子母澤寛作サンデー)毎日所載彌太郎笠三幕七場取締出役桑山盛助(金井)諏訪榮三郎二本差の彌太郎(島田)山椒の豆太郎(九茂)小野塚鐵齋(秋月)うづみの與吉、市場の吉太郎(小川)内弟森甲州浪人平井(伊藤)松井田郎(貨元虎太郎)雄鳥丹下左膳(辰巳)旗本鈴川吹十郎、安中の貨元お神樂の大八(高本)結梗屋お牧(久松)娘彌生、虎太郎娘お雪(二葉當り矢お賢(永島)老女中おさよ(初瀬)

新聲劇

お目見得

角座

十月卅一日初日
毎日晝夜二回開演

【狂言】第一南海人作徳田純宏演出「中村

大尉遭難事件」五景照明村田芳生装置藤井亞木良、第二北村壽夫作野淵起演出「附馬哲學」(當世立志傳)十景照明村田芳生装置大森正男・第三子母澤寛原作キダ所載栗島袂衣脚色徳田純宏演出「投げ節彌之」八場装置藤井亞木良

【配役】無頼漢、投げ節彌之(辻野)富豪の息、戒名負の長次(小波)來賓、藩士栗持新吾(原來賓、藩士四村新吾(中澤)關玉術、別世界の男(藤本)貨元忠吉(伊川)良元、無頼漢吉六(芝田)酒場の主人、同心香山佐太郎(原田)書生、煮賣屋の亭主(吉田)井杉延太郎、富豪(波多)中村大尉、ある男(山口)ハルピンお松、富豪の妻(歌浦)若い婦人、新造お仙(磯邊)姐さん、忠吉の妹娘お花(福岡)伯爵令嬢、仲居お兼(小松)日本娘お澄、伯爵夫人(金剛)藝者三次、お虎(澤井)忠吉の姉娘お千代(富士野)伯爵、稻葉の彌吉(中田)

文樂座・人形浄瑠璃

十一月本格興行

一日 初日
毎日午後三時開幕

【狂言】前近松半三二百五十年忌に因に通し狂言切「伊賀越道中双六」切「桂川連理柵」運行の段

【大夫三味線配役】前「伊賀越道中双六」郡山八幡宮大内記(和泉)五右衛門(長尾)林左

衛門(貴鳳)お若(文)近習(さの、津磨) (歌助、友之助) 政右衛門屋敷(千駒、播路、友駒、友二) 次、駒 重造) 切(土佐、吉兵衛) 大廣間大内記(文字) 政右衛門(相生、林左衛門(鏡) 五右衛門(辰、陸路) 近習(長子)(司、廣助) 沼津里(津、綱造、綱右衛門、小綱、綱治) 新關口(富、八助、廣太郎) 奥鑿、つばめ、町、源路、駒尾、小松、可美津城、新左衛門、仙糸、芳之助、寬市、吉津、新三郎、新吉、吉男、新八、竹藪(綾可太郎、喜代之助) 岡崎中(鳥、猿太郎、清二郎次、大隅、道八) 切(古靱、清六) 切(桂川連理綱) 道行おはん(南) 部長右衛門(小春) ツレ(浪花、喜久、隅榮、文字、佐久) 彌、團六、友造、友平、友若、友衛門、團二郎、福太郎、友駒、勝芳、仙三郎、猿若)

曾我廼家五郎劇

創立三十年記念興行

京都・都・南座
神戸・松竹劇場(下包)
毎日午後四時半開幕

【狂言】 第一「灯ともし頃」二場・第二「越

後獅子」二場・第三「幸運の渦巻」二場・第四「作業服」二場・第五「鴨川千鳥」二場
【配役】 木村一雄、旅館の主人小泉、職工吉田兼吉、熊吉の女房(五郎) 會社員西田、茶屋の亭主、白痴の龜太郎、盗人ドラ猫の太八、大工熊吉(蝶六) 會社員の妻、伯母沙見、宗兵衛の妻、芳川の妻、紳士山川(大磯) ポート貸屋、一雄の兄久太郎、會社支店長、棟梁今井(小次郎) 小使平井、神官、木村久右衛門、熊吉の友人(朝) 表具師、向寺寬念、久太郎の妻、旅行團(林蝶) 小使の女房、一雄の妻、政右衛門の娘、藝妓萬龍(秀蝶) 女將、下女、長屋の嬢、女給(時和) 市電信號手、下男、温泉宿の主人、番頭(時右衛門) 女髮結兼吉の妻、女將(桃蝶) 理髮師、金貨宗兵衛、辻易者、仲居お梅(五郎丸) 官吏小坂、女工募集員、警官、棟梁佐伯(四郎)

關西花形大歌舞伎

京都 都座

十一月一日 初日
晝の部正午開幕
夜の部五時半開幕

【晝の部】 第一近松門左衛門原作食滿南北脚色「高野山女人堂心中萬年草」二幕・第二「鷗山姫捨松」雪責の場・第三所作「釣女」常磐津連中・第四「菅原傳授手習鑑」佐太村

の場
【夜の部】 第一「壽會我對面」一幕・第二「觀容女舞衣」酒屋の場・第三「岩倉宗玄」一幕 第四坪井正直作「辻斬」二幕・第五「夕霧伊左衛門廓文章」吉田屋の場常磐津連中竹本連中

【役割】 太郎冠者、舍人櫻丸、岩倉宗玄、藤屋伊左衛門(長三郎) 成田久米之助、息女中將姫、醜女、昔屋半七、嫁おその、三代將軍家光、扇屋夕霧(吉雀) 櫻丸女房おきき、折翠姫、柳生但馬守、吉田屋女房おきき(成太郎) 岸の和田の九兵衛、侍女浮舟、舍人梅王丸、曾我十郎祐成、梶山太市郎、太鼓持豐作(駒之助) 雜賀屋花之丞、梅王女房春、西吉弘、侍女宮路、若い者鶴藏(かなめ) 世嗣八彌、化粧坂の少將、侍女芳野若い者銀二(芝藝雀) 雜賀屋與次右衛門、横佩豐成卿、百姓白太夫、小林朝日奈、舅宗岸、大久保彦左衛門(九洲次吉) 祥院法師、藤原大貳廣嗣、親半兵衛、松本重太夫、若い者松藤(市昇) 下部市介、下部、梶原平三景時、老いたる町人、阿波の大盡(橋下郎) 美濃屋作右衛門、松王女房千代、大磯の虎植田半藏、太鼓持福八(鷹之助) 伊吹千右衛門、久米之助おさつ、御臺岩根御前、大名、舍人松王丸、工藤祐經、奴飼助、吉田屋喜左衛門(吉三郎) 雜賀屋娘お梅、美女、美濃屋三勝、太鼓持圓八(延太郎) 有村主膳曾我五郎時政(齋之助)

編輯後記

一年振りに吉右衛門が來演、關西人士が渴仰してやまなかつた一座と、九月以來中座に居据り關西劇場のために氣を吐いてゐる魁車の合同……「馬

鹽」「逆纏」「河内山」と吉右衛門が十八番物揃ひに新作「與作重の井關の馬士唄」に「二人狸々」「三社祭」「吉原雀」の舞踊三種で歌舞伎の秋は正に燦然……

浪花座は新國劇が二ヶ月に渉る打ち越しに角座の新聲劇競演、交樂座の人形淨瑠璃掉尾陣、京南座の曾我廼家五郎劇、京都座の花形大歌舞伎等關西劇場の十一月は凡て華だ。

茲に本誌も珠玉篇を網羅して錦秋特別號の面目躍如とした本號を送り出す事が出来た。

吉右衛門の光秀、松右衛門、宗俊の三役に對し、

矢田挿雲、森ほのほ、高谷伸、遠藤爲春諸先生がそれ／＼蘊蓄を傾倒され、絶品の同儷の三役は紙上に輝いてゐます、舞臺と共に御覽になれば一層興味深いものです。

近松半二百五十年忌に因む倉田啓明氏の半二研究「人形淨瑠璃史に於ける半二の功蹟」は演劇研究家は勿論我が郷土藝術愛好家に特に一讀をおすすめします。山本先生の「扇雀に寄す」と西尾先生の「成駒家兄弟の舞臺」は共に成駒屋兄弟を語る快絶篇、深刻な批判にほとばしる友誼となつかしい思出とは秋宵好個の讀物、子母澤先生から「投節彌之」と「彌太郎笠」とついで寄稿下さいました、新國劇と新聲劇の競演にこの素晴らしく興味あるものと存じます。

尙且下東上中の我が應治郎に就いて富田、日比兩先生から應治郎の近頃と「歌舞伎座不見記」は東都劇場の一斑を味へるものとして終りに特筆いたします

住 田 生

昭和六年十一月一日發行

月刊「道頓堀」第六十二年

◆ 誌代は前金でお拂ひを願ひます。

◆ 郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。

◆ 御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

特價 金參拾錢(郵費五圓)

昭和六年十月卅一日印刷
昭和六年十一月一日發行

編輯者 鳥 江 鎮 也

印刷者 北島竹次郎

印刷所 桃谷印刷株式會社

大阪市南區久左衛門町八番地

發行所 松竹興行株式會社大阪支店

道頓堀編輯部

作氏雄武藤加・載連日朝誌雜
曉義宮二・影撮・夫一江入・色脚

曙の歌

弘 南 印 ・ 督 監

人新の場劇小地築元

子 洋 浦 三

演出回一第社入

主 演 子 慶 津 高
博 村 津
輔 泰 本 松

共 演 京んか村中 ・ 子 珠 桂 ・ 子 里 松 近 ・ 子 み ぶ 路 山
府 英 星 ・ 一 榮 塚 手 ・ 川 芳 田 長 ・ 兒 洋 岬
子 智 美 草 若 ・ 子 榮 村 中 ・ 江 春 池 小 ・ 枝 美 喜 村



●●● 供 提 マ ネ キ 興 新 ●●●

に下粉白粉 にめ止レア

ムーリク美ブラク

若き日は

人生の黄金時代

その若々しさを
うるはしさを
いつまでも保つことが
確かに出来ます
クラブ美身クリーム
御賞用によつて……



豊かな泡立ち
気高い香り

ムーリク美ブラク

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和六年十月三十一日印刷
昭和六年十一月一日發行

「道頓堀」第六十二輯 第六年十一月號

一部金參拾錢